

8 『我が名は虹』 成井豊十真柴あずき

○ジャンル／時代劇

○ストーリー／元治元年（1864年）春、14歳の青葉は、父・姉とともに京にやってくる。父は小田原藩士だったが、部下の平松が同僚を殺害した事件の責任を取って辞し、新たに岡山藩に士官することになった。3人は旅籠・藤田屋に投宿。宿代をまけてもらうかわりに、掃除や洗濯を手伝う。そして、雑用として働く浪人・鉄と知り合いになる。そこへ、新選組に入隊し、黒田と名前を変えた平松が襲ってくる……。

○出演者／男8＋女6 計14

○上演時間／120分

登場人物

土井鉄蔵（土州浪人）

山下青葉（山下の次女）

衣笠亥三郎（土州浪人・鉄蔵の友人）

えん（亥三郎の恋人）

庫兵衛（漬物商村山屋の主人）

弓（庫兵衛の妻）

黒江数人（新選組隊士）

城之内範助（新選組隊士）

末次要（新選組隊士）

しま（旅籠藤田屋の女将）

巳之吉（旅籠藤田屋の主人・しまの弟）

かよ（旅籠藤田屋の女中）

山下量太郎
(相州浪人)
山下春枝
(山下の長女)

元治元年四月一日の夕方。東山にある、漬物商・村山屋の裏庭。庫兵衛がやってくる。懐から手紙を出して、読み始める。そこへ、弓がやってくる。

1

弓 あなた、夕餉の支度ができましたよ。

庫兵衛 おかずは何かいのう。

弓 お揚げさんのおみおつけと、昆布巻きです。

庫兵衛 なんじゃ、また昆布巻きか。

弓 文句を言わずに、食べてくださいね。毎月一日に昆布巻きを食べるのは、昔

庫兵衛 からの決まりですから。

弓 ようわからんのう。何でそんな決まりがあるんじや。

庫兵衛 商いの心掛けを忘れないためです。「昆布を食べて、こぶうに暮らせ」。

弓 ますますわからん。

庫兵衛 「こぶう」は都の言葉で、「細かく」って意味なんです。つまり、「今月も

庫兵衛 お金に細かく、慎ましく暮らしましょう」ってこと。

弓 飯の時ぐらい、金勘定は忘れりやあええのに。ほいじゃけえ、都の人間は嫌

庫兵衛 いなんじや。

弓 私もですか？

庫兵衛 馬鹿。おまえは別じや。(と弓の手を握ろうとする)

弓
庫兵衛

弓
庫兵衛

あら、その手紙は？
桂さんからじゃ。近いうちに、大事な荷物が送られてくる。ほいじゃけえ、蔵にある漬物を半分減らさんといけん。
半分には？ 一体何が送られてくるんです。まさか、大砲？
それは最後の最後。戦を始める時になつてからじゃ。
じゃ、何です。あ、言わないでください。自分で考えますから。

そこへ、亥三郎が走ってくる。折れた刀を持っている。

亥三郎

弓

庫兵衛

亥三郎

弓

亥三郎

庫兵衛

弓

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

亥三郎

松原さん、蔵を貸してくれ。
どうしたんですか、亥三郎さん。(庫兵衛に) まさか、荷物って、この人？
そねえなわけなからうが。
ええから、わしを蔵に入れてくれ。新選組に追われちよるんじゃ。
新選組に？ どうして？
話は後じゃ。弓さん、蔵の鍵を。
弓、飯にしよう。(と歩き出す)
でも、亥三郎さんは？
(立ち止まって) 何の話じゃ。そこにおけるのは、ただの野良犬じゃろう。放つておけば、すぐによそへ行く。
どういう意味じゃ。
わからんのか。おまえを匿うつもりはないっちゅうとるんじゃ。新選組に目をつけられとうはないけえのう。
あんた、わしが捕まってもええがか？

庫兵衛

別に構わん。食い詰め浪人とは言え、おまえも武士じゃ。仲間を売るような真似はせんじやろう。

亥三郎

ようわかっただぜよ。邪魔したな。(と行こうとする)

弓

待って。そんな刀じゃ危ないですよ。今、代わりを持ってきますから。

庫兵衛

そねえな必要はない。おい、弓！

弓が走り去る。

亥三郎

旦那と違うて、奥方は優しいのう。

庫兵衛

新選組がなぜおまえを追う。顔はまだ知られちよらんはずじゃが。

亥三郎

ついさつき、祇園で森を襲うたんじゃ。そしたら、物陰から三人も出てきお

庫兵衛

森のやつ、おまえに狙われちよることに気づいちよったんか。

亥三郎

ああ。実は、昨日もあいつを襲うてな。

庫兵衛

何じゃと？

亥三郎

ところが、連れを斬っちよる間に、逃げられてのう。じゃから、今日こそは

庫兵衛

と思うたんじゃが。

亥三郎

二日続けて襲うとは、何ちゆう間抜けじゃ。森は会津藩士じゃちゆうて言

庫兵衛

うたじやろうが。新選組が出てくるかもしれんとは考えんかったんか。

亥三郎

じゃけど、昨日の今日で出てくるとは――

庫兵衛

亥三郎、頼むけえ、もうちいと頭を使うてくれ。

そこへ、弓が戻ってくる。刀を持っている。

弓 亥三郎 お待たせしました、亥三郎さん。どうぞ。（と刀を差し出す）

庫兵衛 すまんのう。（と刀に手を伸ばす）

亥三郎 （横から刀を取って）兼定の偽物か。これなら、一両でええじゃろう。

庫兵衛 金を取るが？

亥三郎 今すぐには言わん。晦日まで、ツケにしといちやるけえ。

庫兵衛 人の足元を見やがって。それでも、武士かよ。

亥三郎 わしは村山屋庫兵衛。ただの商人じゃ。（と刀を差し出して）当分、ここへ

庫兵衛 は顔は出すな。

亥三郎 （刀を受け取って）わかちよるぜよ。（弓に）じゃあな。

亥三郎が去る。

弓 庫兵衛 うまく逃げられるといいんですけど。

庫兵衛 心配するな。ああ見えて、なかなか腕が立つ。土佐でも五本の指に入るそう

弓 じゃ。さあ、飯にしよう。

庫兵衛 わかった。鉄砲ですな？

弓 いきなり何を言い出すんじゃ。

庫兵衛 長州から送られてくる荷物ですよ。さっきからずっと考えてたんです。どう

弓 ですか？ 鉄砲なんでしょう？

庫兵衛 その通りじゃ。今月中に五百丁、来月、さらに五百丁。

弓 合計千丁？ じゃ、なるべく香りの強いお漬物を残しましょう。火薬の匂い

庫兵衛 がごまかせるように。

庫兵衛

おまえは本当に頭がええのう。亥三郎とは大違いじゃ。(と弓の手を握ろうとする)

弓

ああ、すつきりした。じゃ、ごはんにしますか。

庫兵衛・弓が去る。

村山屋の近くの路上。亥三郎が走ってくる。立ち止まり、周囲を見回す。そこへ、黒江がやってくる。

黒江

ずいぶん手間をかけさせてくれたな。

亥三郎

わしは追いかけてくれと頼んだ覚えはないぜよ。

黒江

その訛り、やはり、土佐藩士か。

亥三郎

生まれは土佐じゃが、今はどこの国の人間でもない。強いて言うなら、日本人じゃ。

黒江

日本人だと？

亥三郎

えい言葉じゃろう。坂本さんの受け売りじゃがな。

黒江

斬る前に聞いておく。おぬし、名は何と言う。

亥三郎

答える必要はないぜよ。なぜなら、斬られるのはおまんじゃからのう。

亥三郎が刀を抜いて、黒江に斬りかかる。黒江がかわして、刀を抜く。亥三郎がさらに斬りかかる。黒江がかわして、亥三郎に斬りかかる。亥三郎が必死で避ける。そこへ、城之内・末次が走ってくる。

城之内

黒江さん、斬るな！

黒江 城之内。おまえの出る幕ではない。
城之内 そいつにはまだ聞きたいことがある。生け捕りにして、屯所に連れていくんだ。

黒江 下手な情けは無用だ。こいつが素直に捕まると思うか？

城之内 (亥三郎に) 刀を引け。この人はあんたが勝てる相手じゃない。

亥三郎 わしを見くびると、後悔するぜよ。

黒江 いい度胸だ。末次、こいつの後ろに回れ。逃げる素振りを見せたら、容赦なく斬れ。

末次 しかし、城之内さんは斬るなと——

黒江が亥三郎に斬りかかる。亥三郎がかわず。黒江がさらに斬りかかる。亥三郎がかわして、末次に斬りかかる。末次が避ける。黒江が亥三郎に斬りかかる。亥三郎が黒江に突き飛ばされて転ぶ。黒江が亥三郎に刀を向ける。

城之内 そこまでだ、黒江さん！

黒江 (亥三郎に) 立て。

城之内 黒江さん。
黒江 殺しはしない。二度と逃げられないように、足を斬るだけだ。

そこへ、青葉・山下・春枝がやってくる。三人とも旅装をしている。

山下 (黒江に) おい、何をしている。

黒江 (山下を見る。が、すぐに顔を背ける)

山下 黒江 末次 山下 末次 黒江 城之内 青葉 山下 青葉 山下 末次 黒江 山下 城之内 黒江 城之内

(黒江に) 刀を下ろせ。勝負はもう着いているではないか。
末次、そいつを追い払え。

(山下に) 余計な口出しはご遠慮願おう。即刻、立ち去るがいい。

(黒江に) その前に、刀を下ろせ。下ろすまでは、ここを一步も動かん。
父上、やめてください。

やめろとは何だ。いいか、青葉。武士にとつて、最も大切なのは仁の心。すなわち、思いやりだ。三人がかりで一人を痛めつけるのも感心しないが、倒れた相手を斬るのもっと感心しない。

父上。

(笑って) どうする、黒江さん。ここまで言われて、まだ斬るつもりか？

末次、何をしている。俺は追い払えと言ったんだ。

(山下に) 貴様ら、何をしている。俺は立ち去れと言ったんだ。

見ず知らずの人間に指図される謂われはない。

この羽織を見て、わからないのか。我々は新選組だ。

新選組とは何だ。

そうか。じゃ、一から説明してやる。新選組は、会津中将様より市中警護を任された有志の隊だ。都を騒がす浪人どもを根絶やしにするのが、我々の役目。

馬鹿馬鹿しい。都を騒がしているのはおぬしらではないか。(と黒江に歩み寄りながら) さあ、刀を下ろせ。

(山下に刀を向ける)

黒江さん、何をする気だ！

亥三郎が立ち上がり、走り去る。

末次　　おい、待て！

亥三郎を追って、末次・城之内が走り去る。黒江も走り出す。

山下　　待て、平松。

黒江　　（立ち止まる）

山下　　五年ぶりだな。おぬし、いつから都にいる。

黒江　　（振り返って）人違いだ。俺は貴様など知らん。

黒江が去る。

春枝　　今の方、お知り合いですか？

山下　　ああ。まさか、こんな所で再会するとはな。

青葉　　父上、ひどいではないですか。私はやめてくださいとお願いしたのに。

春枝　　やめなさい、青葉。

青葉　　でも、向こうは三人もいたんですよ。もし斬り合いにでもなっていたら――

山下　　武家の娘が斬り合いを恐れてどうする。

青葉　　私は恐れてなどいません。

春枝　　嘘をおっしゃい。足が震えてるじゃないの。

青葉　　違います。これは怒りで震えてるんです。大体、父上はいつも勝手すぎます。

私　　私の言うことなんか一つも――

山下

わかったわかった。その続きは、宿に着いたらたっぷり聞いてやる。さあ、行くぞ。

山下が去る。

春枝

青葉、もういいでしょう？ 結局、父上はご無事だったんだから。

青葉が頷く。春枝・青葉が去る。

前場のすぐ後。清水坂の近くにある、旅籠・藤田屋の玄関。しまがやってくる。帳簿を持っている。

しま 巳之吉！ 巳之吉！

そこへ、かよがやってくる。

かよ どうしたんですか、女将さん？

しま 巳之吉の姿が見えないのよ。どこへ行ったか、知ってる？

かよ 旦那さんなら、一刻ほど前に、昆布巻きを買いに。

しま ああ、今日は一日だったわね。でも、なぜそんな物をわざわざ巳之吉が？

かよ すみません、私が頼みました。旦那さんが帳簿に突っ伏して、居眠りしてた

から、「この野郎！」と思つて。

しま その気持ちは私にもわかるわ。でも、おかしいわね。昆布巻き一つ買うのに、

かよ 一刻もかかるなんて。

しま どれにしようか、迷ってるんでしよう。下手な買い物したら、女将さんに

叱られるから。この前、千枚漬を頼んだ時なんか、丸一日かかったんです

よ。

しま
かよ

それじゃ、今日も？
夕餉には間に合わないと思います。たぶん。

そこへ、
てくる。
巳之吉がやってくる。布包みを持っている。後から、山下・青葉・春枝がやっ

巳之吉

ただいま。

かよ

お帰りなさい、旦那さん。随分早かったですね。

巳之吉

まあな。ほら、これ、昆布巻き。(と布包みを示して) 十軒回って、一番安

しま

いのを買ってきた。

巳之吉

十軒も回る暇があったら、なぜ他の仕事をしないの。

しま

でも、これ、値段のわりにうまいんだよ。

巳之吉

この帳簿を見なさい。(と帳簿を開いて) 昨日の分、まだ途中じゃないの。

しま

ああ、それは帰ってからやろうと思ってたんだ。そんなことより――

巳之吉

それから、これ。こんなに高い包丁、どうして買ったの。

巳之吉

ああ、それは木戸屋のご主人が「今なら特別に、饅頭をおまけする」って言

しま

うから。そんなことより――

かよ

どうして饅頭なんかにつられるの。今すぐ、返してらっしゃい。

しま

女将さん、(と山下たちを示して) もしかして、お客様じゃないですか？

かよ

え？(巳之吉に) そうなの？

山下

やっど気づいてもらえたようだな。

しま

これは失礼いたしました。(巳之吉に) どうしてもっと早く言わないの。

かよ

女将さんが言わせなかつたんじゃないですか。

山下

巳之吉

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

山下

(しまに)元小田原藩士、山下量太郎だ。清水坂で、こちらのご主人が財布を落としたのを、上の娘が気付いてな。追いかけて渡したついでに、尋ねたのだ。この近くに、安くていい旅籠はないかと。

(しまに)それでうちへお連れしたんだ。

あんた、うちが安いつて言ったの？

迷惑だったか？

いえいえ、とんでもない。私、巳之吉の姉で、しまと申します。

娘の春枝です。こちらは妹の青葉。

それじゃ、あなたが巳之吉の財布を？ 弟を助けていただいて、ありがとうございます。

当然のことをしたまです。早速ですが、宿賃はおいくらでしょうか。

松が三百文、竹が二百五十文、梅が二百文になります。

二百文ですか。

これでも、都では安い方で――

(春枝に)巳之吉がお世話になったんですもの。もちろん、まけさせてもらいますよ。二百文から五十文引いて、百五十文でいかがでしょう？

ありがとうございます。それでは、梅で。

承知いたしました。かよ、皆様をお部屋へご案内して。

その前に、女将に頼みたいことがある。

もう、何でも仰ってください。

私が小田原藩を辞したのは五年前。以来、浪々の身となつて、娘たちには随分ひもじい思いをさせてきた。が、この度、縁あつて、岡山藩に仕官するこ

しま
山下

それはそれは、おめでとうございます。
しかし、岡山へ行くにはかなりの金がかかる。小田原からここまで、俵約に
俵約を重ねてきたが、残りはずか。そこで、さらに一層の俵約を図るため、
ここで働かせてもらえないだろうか。

しま

は？

山下

早い話が、もっとまけてもらいたいのだ。頼む。(と頭を下げる)

しま

わかりました。あと三十文引いて、百二十文で結構です。

山下

もう一声。

しま

じゃ、百文。これ以上は、びた一文まけられません。

山下

かたじけない。

春枝

(しまに)掃除でも洗濯でも、何でも言いつけてください。明日の朝までは、

山下

こちらの旅籠の人間になったつもりで働きますから。

青葉

いや、出発はもう少し先になるかもしれん。

山下

なぜですか、父上？

しま

ちよつと用を思いついてな。(しまに)二、三日、世話になっても構わない
だろうか。

しま

どうぞ、好きなだけいらしてください。かよ、ご案内して。

巳之吉

俺が行くよ。(と布包みをかよに渡して) 山下様、こちらへどうぞ。

巳之吉・山下・春枝・青葉が去る。

かよ

いいんですか、女将さん？ 百文で泊めたら、百文の損。三人で三百文の損
ですよ。

しま

大丈夫よ。(と帳簿を開いて) 巳之吉の買った包丁が百五十文。これを返せば、百五十文が戻る。それから、今月の巳之吉の小遣いを百文減らして、かよのお給金を五十文減らせば、ちょうど三百文。

かよ

なるほど。え、私ですか？

しま

元はと言えば、おまえが悪いのよ。巳之吉なんか買い物に行かせて。

かよ

でも、あの人たち、二、三日、世話になるって言ってましたよね？ 二日泊

まったら、また三百文の損ですよ。

しま

その分はしっかり働いてもらいます。血反吐を吐くまで。

しま・かよが去る。

藤田屋の裏庭。青葉・春枝がやってくる。二人とも竹箒を持っている。二人が地面を掃き始める。

青葉

姉上は恥ずかしくありませんか？ 宿賃をまけてもらうかわりに、働くん

て。

春枝

仕方ないでしょう？ 父上がお決めになったことなから。

青葉

でも、今度ばかりは許せません。こんなことをするぐらいなら、野宿でもした方がマシです。

そう？ 庭掃除なら、小田原にいた時もよく二人でやったじゃない。

春枝

あれは自分の家の庭だったから。

青葉

でも、やることは同じよ。私は掃除も洗濯も大好き。好きなことをして、ま

春枝

けてもらえるなんて、お礼が言いたいぐらいよ。

青葉

姉上は何でも上手だから。

春枝
青葉

あなたもすぐに上手になるわよ。でも、そのためには痲癩を治さないと。子供扱いしないでください。今だって、こうして我慢して、やっってるじゃないですか。

そこへ、鉄蔵がやってくる。薪を抱えている。

春枝

こんにちは。

鉄蔵

(頭を下げる)

春枝

こちらで働いていらつしやる方ですか？

鉄蔵

ええ、そうですが。

春枝

山下春枝と申します。こちらは妹の青葉。

青葉

(鉄蔵に)はじめまして。

鉄蔵

お客さんですか？

春枝

二、三日、泊まらせていただきます。よろしくお願いいたします。

鉄蔵

お客さんが、なぜ掃除を？

春枝

私たちは岡山へ行く途中なんです、路銀が少々心許なくなってます。それで、こちらの女将さんに、宿賃をまけていただくかわりに、働かせ

青葉

てくださいますか？

春枝

そんなことまで言わなくてもいいでしょう？

青葉

でも、本当のことだもの。

そこへ、かよがやってくる。

かよ 春枝さん、食事の支度を手伝ってもらえますか？
春枝 わかりました。青葉。
かよ あ、青葉さんはお掃除の続きをしてください。庭が終わったら、玄関の前も
春枝 お願ひしますね。
青葉 (青葉に) しっかりやるのよ。
わかってます。

青葉が地面を掃く。箒が鉄蔵の足に当たる。鉄蔵がよろけて、薪を落とす。

かよ もう、何をやってるのよ、鉄さん。

青葉 違うんです、私が箒を当ててしまつて。

かよ (鉄蔵に) どうせボーツとしてたんでしよう？ 青葉さん、気にしなくてい

いですよ。この人はいつもこうなんだから。

春枝 (鉄蔵に) お手伝ひします。

かよ いいんですつてば。それより、早く台所へ。

春枝・かよが去る。鉄蔵は薪を拾っている。

青葉 (薪を拾つて) ごめんなさい。

鉄蔵 謝ることはないぜよ。悪いのはわしなんじゃから。

青葉 でも。

鉄蔵 かよさんの言う通り、ボートととつたんじゃ。いろいろ考えてしもうて。

青葉 どんなんことを？

鉄蔵

青葉

鉄蔵

青葉

鉄蔵

青葉

鉄蔵

青葉

鉄蔵

青葉

鉄蔵

いや。もつと南の、今熊野ちゆう所に。古くて汚い長屋じゃが、一人じゃから十分じゃ。

独り暮らしですか。羨ましいなあ。

そうか？

だって、気楽じゃないですか。何をしても、叱られずに済むし。

叱るっちゆうことは、それだけおまんのことを思うちよるちゆうことじゃ。

でも、私は今年で十四です。いつまでも子供扱いされたくありません。

もう大人じゃと言いたいのか。

ええ。

やっぱり、おまんは偉いのう。わしは今年で二十六じゃが、中身は子供のま

まじや。情けない話じゃがのう。じゃ、わしは仕事に戻るぜよ。

掃除が終わったら、覗きに行ってもいいですか？

釜炊きなんぞ、見てもつまらんぞ。まあ、わしは構わんが。

鉄蔵が去る。反対側へ、青葉が去る。

次の日の夕方。藤田屋の玄関。しまがやってくる。布包みを持っている。

しま 巳之吉！ 巳之吉！

反対側から、かよがやってくる。

かよ お帰りなさい、女将さん。

しま かよ、巳之吉はどこ？

かよ 台所でお釜を磨いてますけど。旦那さん、また何かやったんですか？

しま (布から包丁を出して) これ、引き取ってもらえなかったのよ。買ってから

二日しか経ってないのに、かなり擦り減ってるんですって。巳之吉の馬鹿が

ゴリゴリ研いだに違いはないわ。

かよ いいえ、研いだのは私です。

しま かよが？

かよ 旦那さんの研ぎ方があまりに下手なんで、イライラしちゃって。「包丁って

いうのはこう研ぐんです」って、お手本を見せてたら――

しま 研ぎすぎちゃったのね？

かよ 旦那さんは悪くありません。百五十文は、私のお給金から引いてください。

しま 何を言ってるの。おまえは巳之吉のためにやったんでしよう？
かよ 女将さん。
しま 七十五文でいいわ。後の七十五文は、巳之吉の小遣いから引くから。
かよ そう来ると思ってた。その包丁、旦那さんに渡してきます。

しまがかよに包丁と布を渡す。そこへ、黒江・城之内・末次がやってくる。

城之内 ご主人はいますか。
しま 奥におりますが、一体どのようなご用件でしょうか？
城之内 こちらの泊まり客について、少し聞きたいことがあるんです。
しま それでしたら、私が承ります。私、主人の姉で、しまと申します。
城之内 新選組一番隊士、城之内範助です。昨日からこちらに、山下量太郎という男
しま が泊まっているはずですが。
かよ、何してるの。早く包丁を持っていきなさい。

かよが去る。

しま 失礼いたしました。それで、どんなご用件でしたっけ？
黒江 何度も言わせるな。山下はいるかと聞いたんだ。
しま 山下様ですか。お客様はたくさんいらっしやいますので、山下だけでは。
末次 忘れっぽい女だな。下の名前は量太郎だ。四十過ぎで、娘を二人連れている。
しま 親子連れの方も、一組や二組じゃございませぬので。
黒江 貴様、とぼけるつもりか？

しま まさか。今、宿帳を持ってまいります。少々お待ちください。

黒江 その必要はない。(城之内・末次に)行くぞ。

城之内 部屋を片っ端から覗いて回るつもりか？ そんなことをしたら、旅籠中が大

騒ぎになるぞ。

末次 しかし、他にどんな方法があります。

城之内 まあ、そう慌てるな。女将さん、山下からどんな話を聞いたか知らないが、

騙されちゃいけません。やつは長州の人間です。都へ来たのは、同士に密書

を渡すため。

しま ご冗談はやめてください。今の都に、長州の方がいらっしゃるわけないでし

城之内 よう。去年の八月に追い出されたんだから。

それが近頃、舞い戻ってきてるらしいんですよ。やつらは何かを企んでいる。

山下の密書を見れば、それがわかるかもしれないです。どの部屋にいるか、

教えてもらえませんか。

しま そう仰られても、山下だけでは。

末次 また忘れたのか？ 下の名前は量太郎だ。

黒江 もういい。行くぞ、末次。

末次 しかし、城之内さんは慌てるなと――

黒江が走り去る。後を追って、城之内・末次も走り去る。しまも後を追う。

藤田屋の台所。山下・巳之吉がやってくる。

巳之吉 どうもありがとうございます。山下様のおかげで、あつという間に磨き終

わりました。

山下

巳之吉

山下

巳之吉

山下

巳之吉

山下

巳之吉

山下

巳之吉

そこへ、かよが走ってくる。包丁を持っている。

かよ

巳之吉

かよ

巳之吉

かよ

山下

かよ

山下

かよ

山下

ご主人は、いつもあのようなことをさせられているのか？

はあ。主人と言っても名ばかりで、帳簿一つ、満足につけられないので。

しかし、釜を磨くのは板前の仕事であるう。

私は別に構いません。実を言うと、私は子供の頃から、板前になりたかった

んです。

それならば、姉上にそう言えばいいではないか。

言っても無駄です。私は手先が不器用で、板前には向いてないんです。

私も幼い頃は不器用で、剣術が苦手だった。が、どうしても強くなりたくて、

命懸けで稽古した。命懸けでやれば、できないことなどないのだ。

そうでしょうか？

山下様、大変です！

やめろ、かよ。山下様は怠けてなんかいない。俺を手伝って、鍋を磨いてく

れたんだ。

知ってますよ、そんなこと。

だったら、その包丁をよこせ。早く。

はい、どうぞ。(と包丁を巳之吉に渡して) 山下様、逃げてください。

なぜだ。

新選組の連中があなた様を捕まえに来たんです。

今、連中と言ったな？ 来たのは一人ではないのか。

三人です。大きいのと小さいのと地味なのと。

巳之吉

かよ

山下様は勤皇派のお方だったんですか？
決まってるでしょう？ 新選組が来るぐらいだもの。（山下に）何をのんびりしてるんですか。早く逃げてください。

山下

私には、逃げねばならぬ理由などない。会ってくるとしよう。

かよ

そんな、危ないですよ。山下様！

山下が去る。後を追って、かよ・巳之吉が去る。

藤田屋の廊下。青葉・春枝がやってくる。二人とも雑巾を持っている。床を拭き始める。

春枝

青葉、父上から聞いた？ もうしばらく、ここに泊まることになるかもしれない。

青葉

え？ 出発は明日じゃないんですか？

春枝

ご用事が長引きそうなんだって。父上はとりあえず十日って仰ってたけど。

青葉

つまり、ここで十日も働くってことですか？

春枝

そういうことになるわね。青葉、お願いだから、痲癩を起こさないで。

青葉

姉上、父上のご用事って何なんですか？

春枝

さあ。ごまかすのはやめてください。父上は昼間、どちらへ行かれたんです。新選

組の屯所ですか？

春枝

あなた、どうしてそれを？

そこへ、黒江・城之内・末次がやってくる。後からしまもやってくる。

黒江

(春枝に) 山下の娘だな。

しま

違いますよ。この子たちはうちの女中で――

末次

ごまかしても無駄だ。俺たちは昨日、会ってるんだから。

黒江

(青葉の腕をつかんで) 山下はどこにいる。答えろ。

春枝

乱暴はやめてください。(と黒江の腕をつかむ)

黒江

(春枝を振り払って、青葉に) 答えなければ、斬る。これは脅しではない。

城之内

やめろよ、黒江さん。相手は子供だ。

春枝

(懐剣を抜いて、黒江に) 手を放しなさい。早く。

末次

貴様、何のつもりだ？

春枝

(黒江に) あなたたちこそ、父に何の用です。

城之内

会って、話したいだけだ。だから、そんなものは仕舞って。

春枝が黒江に斬りかかる。黒江がかわして、青葉を放す。春枝が青葉を背後に庇う。黒江が刀を抜く。

城之内

おいおい、女子を斬るつもりか？

しま

春枝さん、逃げて！

そこへ、山下がやってくる。後から、かよ・巳之吉もやってくる。

山下

(刀を抜いて、黒江に) やめろ。娘たちに手を出すな。

黒江

山下量太郎。親子連れなら、我々の目を欺けると思ったか。

山下

何を言ってる。

末次 とぼけるな！ 同士に渡す密書はどこだ。

山下 そんな物は持っていない。

城之内 山下さん、我々はあなたの命まで取ろうってわけじゃない。とにかく一度、

刀を納めてください。

黒江 やめろ、城之内。密書を手に入れたかったら、この男を斬るしかない。

山下 平松、こんなことをして、恥ずかしいとは思わないのか。

黒江 黙れ！

黒江が山下に斬りかかる。山下がかわす。末次が山下に斬りかかる。山下がかわす。春枝が末次に斬りかかる。末次がかわす。黒江が春枝の腕を斬る。

青葉 姉上！（と春枝に駆け寄る）

春枝 逃げなさい。早く！（と青葉を突き飛ばす）

山下 行け、青葉！

青葉が走り去る。末次が青葉の後を追おうとする。山下が末次に斬りかかる。末次がかわす。黒江が山下の肩を斬る。

春枝 父上！（と山下に駆け寄る）

末次が走り去る。黒江が春枝に斬りかかる。山下が春枝を突き飛ばし、黒江に斬りかかる。黒江がかわす。山下が春枝の背中を押し、去る。後を追って、黒江・城之内も去る。かよ・巳之吉も後を追う。しまは青葉の後を追う。

藤田屋の裏庭。鉄蔵がやってくる。立ち止まり、振り返る。そこへ、青葉が走ってくる。

青葉 鉄さん、助けて。

鉄蔵 どうした。(母屋を示して) あれは何の騒ぎじゃ。

青葉 新選組が来たんです。父を殺すために。

鉄蔵 何じゃと？

青葉 いくら父でも、相手が三人では、勝ち目ありません。お願いです。助けてください。

鉄蔵 無理を言うな。わしには斬り合いなんぞできん。

青葉 姉も一緒にいるんです。姉は私を逃がそうとして、腕を――

鉄蔵 (青葉の手をつかんで) こっちへ来い。

青葉 何をするんです。

鉄蔵 ええから、早く隠れるんじや。

鉄蔵が青葉を物陰へ隠れさせる。そこへ、末次が走ってくる。

末次 こつちに娘が来なかつたか。

鉄蔵 (顔を背けて) さあ、私は見てませんが。

末次 本当だろうか？

鉄蔵 そう言えば、ついさっき、「助けて」という声が。

末次 その声はどっちから聞こえた。

鉄蔵 屋根の上の方からです。

末次 屋根の上？ くそー、梯子はどこだ？

末次が走り去る。

鉄蔵 青葉さん、もう大丈夫じゃ。

青葉が物陰から出てくる。そこへ、しまが走ってくる。

しま 青葉さん、まだこんな所にいたの？

青葉 父上と姉上は？ 二人ともご無事ですか？

しま わからない。とにかく、あなたは早くここから逃げなさい。

青葉 でも、どこへ？

しま 都に知り合いはいないの？

青葉 一人も。

しま そうだ。鉄さんの所へ行けばいいんだ。今熊野なら、あいつらも追ってこないだろうし。

鉄蔵 冗談じゃない。わしを巻き込まんでくれ。

しま この子の命がかかっているのよ。あなたしか、助けられる人はいないの。青葉さん、あなたからも頼んで。

青葉 (鉄蔵に) お願いします。

鉄蔵 しかし、うちの長屋は古くて汚いし、ネズミもいっぱいおるし――

青葉 鉄さん。

鉄蔵 仕方ないのう。一晩だけじゃぞ。

鉄蔵

鉄蔵・青葉が走り去る。そこへ、かよが走ってくる。

かよ 女将さん、大変です！

しま 今度は何？

かよ 旦那さんが新選組にやられたんです。「命だけは助けてやってくれ」って、

しま いきなり小さいのに抱きついて。

かよ まさか、斬られたの？

しま 突き飛ばされて、柱にぶつかって、気を失いました。どうしましょう？

かよ 風邪を引かないように、布団をかけておきなさい。それより、山下様と春枝

しま さんは？ 二人とも無事でしようね？

しま・かよが走り去る。

前場のすぐ後。今熊野にある長屋の、鉄蔵の部屋。亥三郎がやってくる。徳利と猪口を持って。床に座り、徳利から酒を注いで飲む。そこへ、鉄蔵がやってくる。

鉄蔵

人の部屋に勝手に入るな。夜盗かと思うたぞ。

亥三郎

何じゃ、その言い種は。せつかく一緒に飲もうと思うて待っちゃったのに。

鉄蔵

嘘をつけ。どうせまた、えんと喧嘩して、追い出されたんじやろう。

亥三郎

まあな。

鉄蔵

悪いが、帰ってくれ。客を連れてきたんじや。

亥三郎

何が客じゃ。そんな嘘をついてまで、わしを追い返したいんか？

鉄蔵

嘘じゃない。(外に向かつて) 青葉さん、入ってくれ。

青葉がやってくる。

青葉

失礼します。

亥三郎

(鉄蔵に) なんじゃ、そのガキは。

青葉

ガキですって？

鉄蔵

待て待て。こいつは別に悪気があって、言うたんじやない。

青葉

でも、初対面の人間に向かつて、あまりに無礼ではないですか。

亥三郎
鉄蔵
何じゃ。
ガキにガキと言つて、何が悪い。あれ？

亥三郎
鉄蔵
（青葉に）おまんの顔には見覚えがある。前にどこかで会うたぜよ。そんなわけなからうが。この人は、都へ来たばかりなんじゃから。

亥三郎
青葉
いいえ、確かにお会いしました。昨日の夕方、東山で。そうじゃ、あの時の娘じゃ。おまんの父上のおかげで、何とか逃げ切るこ

亥三郎
鉄蔵
ができた。札を言うぜよ。
一体、何があつたんじゃ。

亥三郎
青葉
いや、その、茶店で団子を食うちよつたら、隣の席に新選組のやつらが座つてのう。わしの団子を見て、一つ寄越せと言つてきたんじゃ。わしが断ると、「生意気なやつじゃ、刀を抜け」と喚きよつた。そこへ、こいつの父上が通りかかつて、わしを逃がしてくれたというわけよ。（青葉に）のう？
鉄蔵
鉄さんに知られてはまずいのですか？
亥三郎
べこのかあ。おまんは「はい」と言うとりやあええんじゃ。

そこへ、えんがやってくる。

えん
鉄蔵
鉄さん、うちの人は来てる？

えん
鉄蔵
ああ。すまんが、連れて帰つてくれるか。
（亥三郎に）さっきは叩いたりして、悪かつたわね。仲直りの印に、一緒に

青葉
寝よう。（青葉を見て）あら、その子供は？
子供ですって？

鉄蔵
えん、青葉さんに謝れ。

えん
鉄蔵

えん
鉄蔵

亥三郎
鉄蔵

青葉
えん
亥三郎

えん
青葉
青葉

えん
青葉

どうしてよ。

確かに、青葉さんは十かそこらに見えるかもしれん。しかし、実際は十四。もう立派な大人なんじゃ。

そんなお方がどうしてここにいるのよ。鉄さんの知り合い？

昨夜から藤田屋に泊まっちゃった。父上と姉上と三人で。ところが、つい半時ほど前、新選組に襲われたんじゃ。

新選組に？

父上を殺しに来たそうじゃ。せめて青葉さんだけでも助けようと思うて、こへ連れてきたというわけよ。

(青葉に) おまんの父上は勤皇派じゃったのか。違います。

隠さなくていいのよ。この人も鉄さんも、昔は勤皇派だったんだから。と言つても、大した働きはしてないのよ。武市半平太って人の後ろにくつついて、うろうろしてただけさ。

父は勤皇派ではありません。濡れ衣を着せられたんです。

濡れ衣って？

父は五年前まで、小田原藩で剣術指南役をつとめていました。その時の部下の中に、平松という人がいました。その平松が五年前、同僚とその奥方を殺して、逐電したんです。

なぜそんなことを？

理由はわかりません。が、父は責任を取って、藩を辞しました。平松には、藩から追手が出たようですが、行方はつかめなままでした。ところが、昨日会った新選組の中に――

亥三郎
青葉

亥三郎

えん

青葉
亥三郎

青葉

えん
亥三郎

鐵藏
亥三郎

えん
青葉

鐵藏
青葉
えん

あの三人の中に、平松がおったのか？

私と姉は気づきませんでした。平松には一度か二度しか会ったことがなかった。でも、父はあなたを斬ろうとしていた男に、確かに「平松」と言ったんです。

なるほど。おまんの父上は昔のことを知っちよる。じゃから、勤皇派っちゅうことにして、口を封じようと。

でも、おかしいわね。青葉さんたちが藤田屋にいるって、どうしてわかったのかしら。

父は今日、新選組の屯所に行っただんです。

何じゃと？
今朝、姉に話しているのを立ち聞きしたんです。平松に会って、小田原へ戻るように、説得してくるって。でも、うまく行かなかったようです。

そうか。平松は父上の後をつけたのよ。それで、今度は仲間を引き連れて。まっこと、見下げ果てた男じゃのう。我が身を守るために、昔の上司を殺すとは。

べこのえあ。まだ殺されたと決まったわけではない。

そうじゃった。(青葉に) すまんのう。つい、口が滑った。

青葉さん、お母さんは？
私が七つの時に、病で。

じゃ、これからどうするの？ 父上と姉上にもしものことがあったら。
おい、えん。

敵を討ちます。
まさか、平松を斬るって言うの？

青葉 鐵藏 青葉
鐵藏 青葉
鐵藏 青葉
鐵藏 青葉
えん 亥三郎
鐵藏 亥三郎
鐵藏 亥三郎
鐵藏 亥三郎
鐵藏 亥三郎
鐵藏 亥三郎

ええ。(鐵藏に) その時は、私に劍術を教えてもらえませんか。わしが？

私の姉は幼い頃から、父の道場へ通っていました。でも、私は体が弱かったので、いまだに竹刀を持ったこともありません。

そんな人に、仇討ちは無理じゃ。

命懸けで稽古します。一年でも二年でも。

何年やろうが、結果は同じじゃ。返り討ちに遭うに決まっちゃよる。

だったら、あんたが助太刀してあげれば？

そりゃ無理じゃ。鉄さんに、刀を振り回す度胸なんぞない。

なんてこと言うのよ。

いや、亥三郎の言う通りじゃ。わしにや斬り合いなんぞできん。

情けない男じゃ。青葉さん、こんなやつに頼ることはない。劍術じゃったら、

わしが教えちやる。

おい、亥三郎。

(青葉に) こう見えても、わしは鏡心明智流の免許皆伝じゃ。鉄さんより、よっぽど役に立つ。おまんの父上には命を助けられたけえの。今度はわしが助ける番じゃ。

亥三郎、おまんはまだ斬り合いがしたいが？

教えるだけじゃ。仇討ちまでは付き合わん。(青葉に) それでええな？

もちろんです。よろしくお願いします。(と頭を下げる)

おまんら、ええ加減にせんか。青葉さんの父上と姉上は生きちよる。仇討ちの話なんぞ、もうするな。

わかった、わかった。えん、そろそろ引き上げるとするか。

えん

鉄蔵

えん

鉄蔵

青葉

えん

青葉

鉄蔵

そうね。

えん、悪いが、おまんの布団を貸してくれんか。

青葉さんが使うのね？ 別に構わないわよ。今夜はこの人の布団で寝るつもりだったから。(と亥三郎の腕をつかむ)

べこのかあ。青葉さんの前で下品なことを言うな。

私は平気です。夫婦だったら、誰でもすることですから。

堂々と言われると、こっちが恥ずかしくなるわね。じゃ、おやすみ。

おやすみなさい。

すぐに戻る。誰か訪ねてきても、絶対に中に入れるな。

亥三郎・鉄蔵・えんが去る。青葉がうつむき、泣き出す。反対側から、山下・春枝が現れる。

春枝

青葉

山下

青葉

山下

青葉

春枝

山下

青葉。

(顔を上げて) 姉上？

青葉、いつまで泣いているつもりだ。

父上！ ご無事だったんですか？

おまえはもう十四だろう。母上が亡くなった時、春枝は十になったばかりだった。しかし、人前では決して涙を見せなかったぞ。

いつの間に入っていらっしやっただんですか？ なぜすぐに声をかけてくださ

らなかつたんです。

困っていたのよ。あなたが仇討ちなんて言い出すから。

(青葉に) 馬鹿なことは考えるな。仇討ちなどしてもらって、私が喜ぶとで

青葉 春枝 青葉 春枝 青葉 春枝 青葉 山下 青葉 山下 青葉 春枝 青葉 山下 青葉 春枝 青葉 春枝 青葉

も思ったのか。

父上のためではありません。私は姉上のために。

私だって嬉しくないわ。

姉上、お怪我は？

大丈夫よ。もうどこも痛くない。

良かった。(とうつむく)

馬鹿。泣くなど言ってるだろう。

どうして私には話してくださらなかったんですか？ 平松のことを。

決まってるでしょう？ あなたに余計な心配をかけたくなかったからよ。

そんなの、嬉しくありません。私だって、父上の娘なのに。

すまない。

もういいんです。お二人がご無事だったから。

すまない、青葉。

やめてください。それより、すぐに岡山へ行きましょう。三人で。

私たちは行けないのよ。

え？

夜が明けたら、あなたは小田原へ戻りなさい。

どういうことですか？

いい、青葉？ しつかり生きるのよ。

姉上、どうしてそんなことを仰るんですか？ 姉上。

そこへ、鉄蔵がやってくる。布団を抱えている。

鉄蔵
青葉

青葉さん、どうかしたんか？
鉄蔵さん。今、父と姉が――

青葉が春枝と山下のいた方を見る。二人の姿はどこにもない。

青葉

姉上？ 父上？

鉄蔵

二人がここへ来たんか？ いつ？

青葉

たった今まで、私と話を。

鉄蔵

わしが入ってきた時は、おまんしかおらんかったぜよ。

青葉

そんなはずありません。確かに話をしたんです。

鉄蔵

よう見いや。誰もおらんじやろうが。

青葉

きつと、裏口から出ていったんです。裏口はどこですか？

鉄蔵

うちには、裏口なんぞないぜよ。

青葉

……

鉄蔵

たぶん、夢でも見ちよったんじやろう。今日はいろんなことがあったから。

青葉

(うつむいて、泣き出す)

鉄蔵

どうしたんじや、青葉さん。青葉さん。

鉄蔵が青葉の腕をつかむ。青葉・鉄蔵が去る。

翌日の朝。村山屋の座敷。弓がやってくる。後から、黒江・城之内がやってくる。

弓 しばらくこちらでお待ちください。今、お茶を淹れてまいりますので。

城之内 いや、お気遣いなく。話が済んだら、すぐに帰りますから。

弓 でも、せめて一杯だけでも。

黒江 必要ないと言ってるんだ。早く主人を呼んでこい。

弓 承知いたしました。

弓が去る。

城之内 (笑って) 寝不足か、黒江さん？

黒江 なぜそんなことを聞く。

城之内 今日は一段と機嫌が悪いからさ。あの内儀、あんたに怒鳴られて、目を丸くしていたぜ。

黒江 くだらんことを言うな。俺はいつも通りだ。

城之内 それはどうか。末次さんから聞いたよ。昨夜のご帰還は九つ過ぎだったんだって？

黒江 遊びではない。仕事だ。

城之内

黒江

城之内

黒江

それも聞いた。山下の娘を探して、東山を走り回ってたんだろう？ なぜそんなに、あの娘にこだわるんだ。
決まってるだろう。密書を手に入れるためだ。
あんたがそこまで仕事熱心だったとはな。しかし、今日の目的は以蔵だ。こっちの方もよろしく頼むぜ。
貴様に言われなくても、わかっている。

そこへ、庫兵衛・弓がやってくる。

庫兵衛

城之内

庫兵衛

城之内

庫兵衛

城之内

庫兵衛

城之内

弓

庫兵衛

城之内

弓

城之内

弓

お待ちせして、申し訳ありませんでした。村山屋の主の庫兵衛でございます。こちらこそ、朝っぱらから押しかけてきて、すみませんね。
それで、今日はどのような漬物がお入り用ですか？
我々は漬物を買いに来たんじゃない。ご主人に聞きたいことがあります。
私にわかることでしたら、何でもお答えいたします。まあ、話は漬物でも食べながら。
いや、漬物は結構。近頃この店に、土佐弁の浪人は来ませんでしたか？
土佐弁というのと、「ぜよ」とか「まっこと」とかいうやつですか？ ええ、何人かいらつしやいましたよ。
その中に、岡田以蔵という男は？
以蔵って、あの、人斬り以蔵ですか？
弓、おまえは口を出すんじゃない。
内儀さんは知ってるんですか、以蔵のことを。
噂で聞いただけです。勤皇派の中でも一、二の使い手で、もう何人も人を殺

城之内

してるとか。

土佐藩に、武市半平太という男がいましたね。数年前に、国許の郷士をまとめて、土佐勤皇党というのを作ったんです。そして、今度は都へ上り、他藩の勤皇派をまとめようとした。毎晩のように会合を開いて、議論をして。しかし、裏では、自分に反対する者を、次々と暗殺していたんだ。命令するのは武市で、実行するのは以蔵。以蔵は、我々が知っているだけでも、七人は殺しています。

七人も？

去年の八月、武市は藩吏に捕らえられて、土佐に送り返された。しかし、以蔵は都に残って、いまだに暗殺を続けている。幸い、死人は出ていないが。そんな人を、なぜ野放しにしておくんです。

以蔵は足軽の出で、学問はない。しかし、剣の腕は恐ろしいほど立つんです。一昨日も、あと一步の所で逃げられた。こっちは三人もいたのに。

下手をしたら、七人が十人になるところだったんですね？

内儀さんは我々をからかっているんですか？
いいえ、とんでもない。

我々は一昨日、祇園でやつと斬り合いをした。やつは自分の刀が折れると、走って逃げた。我々も後を追ったが、この店の近くで見失った。すぐにまた見つけたが、その時、やつは別の刀を持っていた。
つまり、以蔵を助けた者が、この近くにいますか？

あるいは、今、俺の目の前に。

ご冗談はやめてください。弓はそんなことをする女子ではありません。ええ、そうでしょうとも。以蔵を助けたのは、おそらく、土佐と関わりのあ

弓
城之内

弓
城之内

弓
城之内

黒江

庫兵衛

庫兵衛
城之内

黒江・城之内が去る。

庫兵衛　　る人間だ。この店の奉公人の中に、そういう人はいませんか。さあ、私の知る限りでは一人も。(弓に) おまえはどうだ？

弓　　うちの奉公人は、身元のしつかりした者ばかりですから。(城之内に) もういい。次へ行くぞ。(と立ち上がる)

黒江　　しかし、まだ話が終わってない。

城之内　　これ以上、話しても、時間の無駄だ。

庫兵衛　　そう言わずに、ゆっくりしていつてくください。弓、お二人に漬物を。

黒江　　見ろ。こいつの頭の中には、漬物しか入ってない。

城之内　　じゃ、あと一つだけ。(弓に) 実は一昨日、以蔵に逃げられたのは、邪魔者が現れたせいであってね。それがなんと、長州の人間だったんです。

弓　　長州の？　でも、今の都に長州の方は。

城之内　　その男は一昨日、都に来たんです。同士に密書を渡すために。

弓　　で、その男の人相は？

城之内　　歳は四十過ぎ。見た目はどこにでもいる浪人ですが、娘を二人、連れていま

した。この店には来ませんでしたか？

弓　　ご浪人は何人かいらつしやいましたが、親子連れというのは。

庫兵衛　　(城之内に) 私も覚えがありませんね。

城之内　　(城之内に) だから、無駄だと言ったんだ。行くぞ。

庫兵衛　　(庫兵衛に) 何か思い出したら、すぐに屯所へ知らせてください。

お役に立てなくて、申し訳ありません。お詫び印に、お土産を。

漬物だったら、結構ですよ。

弓
庫兵衛

亥三郎さん、うまく逃げ切れたんですね。
おまえの渡した刀が、役に立ったようじゃのう。

弓
庫兵衛

いいえ。亥三郎さんを助けたのは、親子連れのご浪人です。
密書と聞いた時は、心の臓が止まるかと思つた。じゃけど、わしの知つちよ

弓
庫兵衛

る男とは別人のようじゃ。
長州の方たちはそんなにたくさんいらつしやつてるんですか？
これからもつと増える。長州だけじゃのうて、肥後や土佐のやつらも来る。
来月の祇園会までに、戦の準備を整えるんじゃ。

弓
庫兵衛

忙しくなりますね。
ああ。じゃけど、ほんまに参つたのう。亥三郎のせいで、ちいと動きにくう
なりそうじゃ。

庫兵衛・弓が去る。

同じ日の夕方。藤田屋の裏庭。鉄蔵がやってくる。反対側から、かよがやってくる。

かよ
鉄蔵

鉄さん、昨夜はどうしたのよ。仕事が終わる前に帰つたりして。
すまんのう。ちくと腹が痛うなつて。

かよ
鉄蔵

お風呂の掃除、旦那さんがやつたんだからね。後でちゃんと謝っておいてよ。
ああ。じゃ、わしは女将さんに挨拶してくるきに。

かよ
鉄蔵

女将さんなら留守よ。旦那さんと一緒に、裏のお寺へ行つてる。
寺？
そうか、鉄さんは知らないのよね。昨夜は大変だったのよ。一昨日から、山

鉄蔵
かよ
鉄蔵
かよ

下様ってお武家様が泊まってたでしょう？ ほら、娘を二人連れられた人。その山下様を、新選組が捕まえて来て、斬り合いになって。それで、山下様は？ 殺されたわ。娘の春枝さんも。そうか。でも、青葉さんだけは何とか逃げた。新選組が血眼になって探してるから、すぐに捕まっちゃうと思うけど。

そこへ、しまがやってくる。喪服を着ている。

しま
鉄蔵
かよ
しま
かよ
しま
かよ
しま
かよ
しま
かよ
しま
かよ
しま
かよ

鉄さん、いつ来たの？ たった今じゃ。山下様のことは、かよさんから聞いたぜよ。女将さん、旦那さんは？ まだ、お寺にいます。あの子、「今夜は俺がずっとそばにいます」って言っちゃって。言いながら、子供みたいにびいびい泣くのよ。旦那さんは山下様が好きだったから。どうして春枝さんじゃなくて、山下様なのよ。あの二人はお釜友達だったんです。一緒にお釜を磨いてるうちに、仲良くなつたんですって。女将さん、私もお線香をあげてきていいですか？ いいに決まってるじゃない。今日は客がいないから、ゆっくりしてきていいわよ。

かよが去る。

鉄蔵
しま

鉄蔵

しま

鉄蔵

しま

鉄蔵

しま

鉄蔵

しま

鉄蔵

しま

鉄蔵

客がないとは？

人が二人も殺されたのよ。他の客はみんな出ていったし、新しい客は一人も来ないし。商売上がったよ。ところで、青葉さんは？

わしの部屋におる。わしが帰るまで、外に出るなと言うておいた。

悪いけど、もうしばらく泊めてあげて。

待って待って。一晩だけつちゆう約束のはずじゃぞ。

新選組のやつらが、この辺りを探し回ってるのよ。今、戻ってきたら、すぐに捕まっちゃうでしょう？

じゃったら、他の場所に移せばええ。かよさんの実家とか。

あの子の田舎は神戸よ。遠すぎるわ。

いっそのこと、小田原へ帰らせたどうじゃ。親戚の一人や二人、おるじやろう。

いずれはそうするしかないでしょうね。でも、今の青葉さんには路銀がない。葬式の代金はどうしたんじゃ。女将さんが出したのか？

仕方ないでしょう。うちのお客さんだったんだから。

じゃ、青葉さんの路銀も。

わかった。私が何とかするわよ。でも、百文や二百文じゃ済まないからね。

用意できるまでは、あんたの家に泊めてあげて。

なるべく急いでくれ。青葉さんは、父上と姉上の敵を討つと言うとるんじゃ。

そんなこと、あの子にできるわけないじゃない。

女将さん。山下様を斬ったのは、何という男じゃ。名前はわかるかよ。

黒江よ。山下様も春枝さんも、黒江に斬られたの。

鉄蔵
しま

鉄蔵
しま

鉄蔵
しま

鉄蔵
しま

鉄蔵

しまが去る。反対側へ、鉄蔵が去りかける。そこへ、黒江がやってくる。

黒江

鉄蔵

黒江

鉄蔵

黒江

鉄蔵

黒江

黒江か。

新選組のやつらは前から気に入らなかつたけどね。中にはまじめな人もいるから、我慢してたのよ。でも、あの男だけは許せない。武士のくせに、女子を殺すなんて。春枝さんはまだ十七だったのよ。

妹思いの、優しい娘じゃったな。

そうだ。青葉さんに形見をと思つてね。山下様の刀と春枝さんの懐剣を取つておいたのよ。悪いけど、持つていってくれる？

今はまずい。そんな物を渡したら、ますます頭に血が昇る。

そうか。じゃ、小田原へ帰るまで、私が預かつておくわ。

わしもお線香をあげてきてええかのう？

ええに決まつてるじゃない。客がいないんだから、お風呂を沸かす必要もないし。どうせなら、朝までそばにいてあげて。青葉さんのかわりに。

ああ、そうさせてくれ。

貴様、この人間か。

そうですか。

山下青葉という娘は知ってるな？

ええ、うちのお客様でしたから。

今日、ここへ来なかつたか。

まだ見つかつてないのですか？

俺の質問に答える。

鉄蔵 来てません。
黒江 もし姿を見たら、宮川町にある、金田屋という足袋屋へ知らせろ。通りの入り口に建ってる店だ。
鉄蔵 あなたの名前は。

黒江が刀を抜いて、鉄蔵の顔前で振る。鉄蔵が地面に尻餅をつく。

黒江 腰抜けめ。それでも、武士か。
鉄蔵 何をするんです。
黒江 俺の名は黒江だ。覚えてか。
鉄蔵 覚えました。

黒江が去る。

次の日の朝。鉄蔵の長屋。亥三郎がやってくる。

亥三郎

よう、遅かったのう。

鉄蔵

何じゃ。また喧嘩したがか？

亥三郎

はずれじゃ。今日は本当に、おまんを待っちゃよった。

鉄蔵

すまんが、疲れちよるんじや。寝させてくれ。

亥三郎

ええがか？ 青葉さんが無事かどうか、確かめんで。

鉄蔵

まさか、いなくなつたがか？

亥三郎

またはずれじゃ。今、えんが着替えさせちよる最中じや。

鉄蔵

着替え？

そこへ、青葉・えんがやってくる。青葉は男装をして、刀を差している。

えん

(鉄蔵に) あら、ちようどいい時に帰ってきたわね。

青葉

お帰りなさい、鉄さん。

鉄蔵

何じゃ、その格好は。

亥三郎

(青葉に) ほう、よう似合うちよるのう。ちゃんと男に見えるぜよ。

鉄蔵

おまんの入れ知恵か？

亥三郎

今度は当たりじゃ。新選組が追っちよるのは、娘姿の青葉じゃ。これなら、堂々と表を歩けるじゃろう。

鉄蔵

(青葉に) その着物はどうしたんじゃ。えんさんが仕立ててくださったんです。

青葉

(亥三郎を示して) この人のお古を縫い直しただけよ。

鉄蔵

(青葉に) あっ! その刀、わしのではないか。(と刀に手を伸ばす)
(鉄蔵の腕をつかんで) ええじゃろう、どうせ使わんのじゃから。うわっ!
(と鉄蔵を突き飛ばして) 何じゃ、この匂いは。

えん

線香じゃ。一晩中、寺におったからのう。

鉄蔵

鉄さん、もしかして。青葉さん、落ち着いて聞いてくれ。おまんの父上と姉上は――

青葉

ああ。藤田屋の女将さんがお通夜を出してくれた。

えん

どこのお寺? (青葉に) 今すぐ行こう。

青葉

しかし、新選組が見張っちよるかもしれんぞ。あんたねえ。そういう時のために、男の格好にさせたんじゃないの? 私も行かない方がいいと思います。もしそこに平松がいたら、私にはきつと我慢できません。

えん

いきなり斬りかかるっていうの? それはまずいわ。

鉄蔵

(鉄蔵に) 葬儀の代金はどなたが? 藤田屋の女将さんじゃ。じゃけど、気にせんでええ。返せる時に、返せばえんじゃ。

青葉

後で必ずお礼に行きます。亥三郎さん、稽古を始めてもらえますか。

亥三郎

今からか？

青葉

(袂から簪を出して) 教えていたただく代わりに、これを。私は、他にお金に

なりそうな物を持っていないので。

まあ、高そうな簪。(と手を伸ばす)

えん

(えんの手を叩いて、青葉に) 今はいいい。仇討ちがうまく行ったら、もらう

ぜよ。

鉄蔵

亥三郎。

亥三郎

もちろん、わしは稽古までしか付き合わんがのう。(青葉に) じゃ、まずは

構えからじゃ。わしがやる通りに、構えてみる。

鉄蔵

青葉さん、わしは反対じゃ。一刻も早く、小田原へ帰った方がええ。

青葉

亥三郎さん、よろしくお願いします。

亥三郎が刀を抜く。青葉も真似をして抜くが、ぎこちない。

えん

うわっ、下手くそ。

鉄蔵

べこのかあ。そんなことを言うと、また癩癩玉が。

亥三郎

おまんら、少し黙ってる。(刀を構えて、青葉に) これが正眼。すべての基

本になる構えじゃ。やってみろ。

青葉

(刀を構えて) こうですか？

亥三郎

違う。肩に力が入り過ぎじゃ。(と青葉の肩をつかむ)

えん

あ、肩を触った。

亥三郎

(青葉に) 肝心なのは手首なんじゃ。わしのを見る。(と刀を構える)

青葉

わかった。こうですね？(と刀を構える)

亥三郎

違う違う。どこに目をつけとるんじや。わしが力を入れとるんは、小指だけ
じや。(と青葉の手をつかむ)

えん

(鉄蔵に) あんなに何度も触ることないと思わない?
しかし、触らんことには直せんじやろう。

鉄蔵

(亥三郎に) 青葉さんには、刀が重すぎるのよ。もつと軽い物で稽古したら?
黙れと言ったのが、わからんが。 (青葉に) ほれ、もう一度。

亥三郎

(刀を構えて) こうですか?
違う違う違う。

青葉

やっぱり、重すぎるのよ。私、スリコギを持ってくる。
えん、ええ加減にせんか。

えん

だつて、あまりに下手くそで、見ていられないんだもの。
すみません。

青葉

部屋の中では、思い切り振れんのじやろう。よし、表へ行くか。
そうしよう、そうしよう。私、お弁当を作ってくるわ。

えん

おまんは来んでええ。鉄さん、しばらく青葉を借りるぜよ。
遠くへは行くなよ。新選組が通りかかるかもしれん。

鉄蔵

わかちよる。
(鉄蔵に) 行ってきます。

青葉

亥三郎が去る。

えん

何よ、あれ。どうして私がついていつちやいけないのよ。
なぜ気づかん。おまんは邪魔なんじや。

鉄蔵

えん
鉄蔵
えん

ひどい。私は、少しでも青葉さんの役に立ちたいと思って。
おまんも仇討ちに賛成なんか。
まさか。でも、青葉さんは新選組に追われてる。自分の身ぐらい、守れるよ
うにならないと。

鉄蔵
えん

いくら稽古しても、そう簡単に強くはなれん。
だったら、鉄さんも教えてあげなさいよ。

鉄蔵
えん

わしは剣術が苦手なんじゃ。刀なんぞ、握りたくもない。
だらしないわね。そう言えば、あの人たち、どこへ行ったのかしら。私のい
ない所で、触りまくってるんじゃないでしょうね？

えんが去る。反対側へ、鉄蔵が去る。
四月十五日の夕方。藤田屋の裏庭。巳之吉がやってくる。反対側から、しまがやっ
てる。

しま
巳之吉

お帰り、巳之吉。今まで、どこへ行ってたの？
裏のお寺へ、墓参りに。

しま
巳之吉

また？ あんたの気持ちもわかるけど、毎日行くことはないんじゃないの？
でも、山下様は俺の命の恩人だから。

しま
巳之吉

何が命の恩人よ。ただのお釜友達でしょうが。
違うよ。俺は、あの人のおかげで、やっと目が覚めたんだ。姉さん、俺は板

しま

前になるよ。
何ですって？

そこへ、鉄蔵がやってくる。薪を抱えている。

鉄蔵

しま

旦那さん、また何かやったが？

鉄蔵さんは黙ってて。巳之吉、あんた、いきなり何を言い出すのよ。あんたは

この旅籠の主人なのよ。

俺、主人をやめる。

何じゃと？

巳之吉

しま

今日から、板前の修行をする。命懸けで修行すれば、俺だって――

しま

無理無理。あんたみたいな不器用な子が、板前になれるもんですか。それに、

巳之吉

うちには辰五郎さんて立派な板前がいるし。

すぐに一人前になれるとは思ってないよ。だから、辰五郎さんの弟子にして

もらうんだ。

しま

そんなこと、私が許すと思ってるの？

巳之吉

姉さんは関係ない。俺の人生は俺が決めるんだ。

しま

勝手にしなさい。どうせすぐに音を上げるに決まってるんだから。

しまが去る。鉄蔵が薪を地面に置く。

鉄蔵

巳之吉

旦那さん、今のは本気か？

本気だよ。山下様が死ぬ前に俺に言った。命懸けでやれば、できないこと

はないって。

二人でお釜を磨いた時じゃな？

鉄蔵

巳之吉

山下様には本当に感謝してるんだ。あの人のおかげで、生まれて初めて、姉

鉄蔵 さんに口答えできた。
生まれ初めてじゃったのか。
俺が料理を作るようになったら、鉄さんにも食わせてやるよ。あと、青葉

鉄蔵 さんにも食ってもらいたいな。
なぜ青葉さんに。
恩返しだよ。山下様は亡くなっちゃったから、かわりに娘の青葉さんに。で
も、青葉さん、今頃、どこにいるのかな。

そこへ、青葉がやってくる。

青葉 失礼します。

鉄蔵 あお、あお、青い空は気持ちええのう。

巳之吉 え？ 今日朝から曇り空だけど。

青葉 お久しぶりです、鉄さん。

巳之吉 あなた、鉄さんのお知り合いですか？

青葉 以前、同じ長屋に住んでいた者です。近くまで来たので、ご挨拶に。

鉄蔵 旦那さん、板前の修行をするのはいつからじゃったかのう。

巳之吉 今日からだよ。よし、早速、始めるか。

巳之吉が去る。

鉄蔵 青葉さん、どういうつもりじゃ。もし新選組に見つかりでもしたら――
青葉 大丈夫ですよ。旦那さんだって、気付かなかったじゃないですか。

鉄蔵
青葉

青葉
鉄蔵

青葉
鉄蔵

青葉が去る。反対側へ、鉄蔵が去る。

亥三郎を、これ以上、巻き込まんでくれ。お願いじゃ。

あいつはわしの幼なじみじゃ。あいつの方が年下じゃつから、弟みたいに思うちよる。都に嵐が来た時、わしはあいつに逃げようと言うた。が、あいつは断った。わしにはまだやりたいことがある。じゃから、都に残ると。

亥三郎さんのやりたいことって、何なんですか？

わからん。が、あいつは子供の頃から、血の気が多かった。わしがそばにおらんと、何を仕出かすやら。たとえば、仇討ちの手伝いとかな。

仇討ちは私一人でやります。約束します。

わしは嵐が過ぎ去るのを待ちよる。空が晴れて、虹が出るまで、ここで静かにしていたいんじや。あんたには一刻も早く、都を出て行ってほしい。仇討ちなんぞ諦めて、小田原へ帰ってほしいんじや。

五月一日の昼。村山屋の座敷。庫兵衛がやってくる。凶面を持っている。床に座り、凶面を広げて、眺める。そこへ、弓がやってくる。

弓
あなた、亥三郎さんがいらつしやいましたよ。

庫兵衛
わしはおらんちゆうて言え。

でも、今日はお連れの方が一緒なんですよ。あなたにぜひ会わせたいって。

知らん。わしは今、忙しいんじや。

弓
(凶面を覗き込んで) 何ですか、それは？

庫兵衛
御所の凶面じや。いざっちゆう時、どこから攻めりやええか、考えちよる。

弓
御所を攻めるんですか？ 何のために。

庫兵衛
天子様を、長州へお連れするんじや。

そこへ、青葉・亥三郎がやってくる。

亥三郎
久しぶりじやのう、松原さん。

庫兵衛
凶々しい男じや。誰が入ってええちゆうた。

亥三郎
そう言うな。今日は、わしの弟子を連れてきたぜよ。

庫兵衛
弟子？

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

弓

庫兵衛

青葉

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

青葉

弓

亥三郎

青葉

亥三郎

青葉

亥三郎

青葉

亥三郎

青葉

亥三郎

青葉

亥三郎

名前は山下青太郎。若い、なかなかの使い手じゃ。次の仕事は、こいつにも手伝わせようと思うてのう。

おまえ、正気か？ こいつは若い、ちゆうより、子供じゃろうが。

子供ではない。こいつは若く見えても、今年で二十じゃ。

二十？ ごめんない、まだ十二ぐらいかと思つてました。

いや、せいぜい十じゃろう。

違います、十四です。

べこのかあ。口をきくなち言うたじゃろうが。

亥三郎、わしを騙そうとするとはどういう料簡じゃ。

こいつの本当の歳を言うたら、仕事してもらえんと思つて。

当たり前じゃ。こんな小僧を何ができる。

できますよ、何でも。どんな仕事か知らないけど、立派にやり遂げてみせます。

口をきくなと言うたのが、わからんが。

青太郎さんだったわね？ あなた、亥三郎さんから何も聞いてないの？

ええ。一緒に来いって言われたから、来ただけで。私はてつきり、漬物を買

うつもりなのかと。

青太郎、今日はおまんに実戦を教えちやる。

実戦？

一人で剣を振つちやるだけでは、なかなか強うなれん。実戦で鍛えるのが、

一番の近道なんじゃ。

それはつまり、人を斬るといふことですか？

臆するな。今のおまんなら、できる。

青葉

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

弓

弓が去る。

私が斬りたいのは、平松だけです。他の人は。相手は幕府の役人じゃ。殺した方が、世の中のためになる。

悪いが、今日は仕事はやれんぞ。

なんでじゃ。先月、しくじったからか？

それだけではない。わしは今、大事な計画を進めちよる真っ最中なんじゃ。

暗殺なんぞやって、余計な波風は立てたくない。

大事な計画とは何じゃ。

今は言えん。じゃけど、いずれはおまえにも働いてもらう時が来るじゃろう。

それまでおとなしゅう待ちよれ。

(奥を見て) あら、誰か来たみたい。私、見てきますね。

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

(亥三郎に) 奥へ隠れる。新選組かもしれん。

松原さん、坂本さんが都に来ちよるつちゅうのは本当か。

なんで知つちよる。

えんが働いちよる飲み屋で、そういう噂を聞いてきたんじゃ。あんたが言う

た計画つちゅうのは、坂本さんも関係あるが。

坂本は何も知らん。都へ来たのは、また勝のお供をするためじゃろう。ええ

けえ、早う奥へ行け。

青葉・亥三郎が去る。反対側から、弓が走ってくる。

弓
庫兵衛
弓
庫兵衛

あなた、新選組の城之内様が話をしたいと。
わかった。話は表で聞く。
もう手遅れです。すぐにこちらへいらっしやいます。
どいつもこいつも、凶々しいのう。

庫兵衛が凶面を畳んで、懐に入れる。そこへ、城之内がやってくる。

城之内

失礼します。(庫兵衛に)すみませんね、いきなり来て。

庫兵衛
城之内

いえいえ、新選組の方なら、大歓迎です。おや、今日はお一人ですか？
今日は本当は非番だったんですよ。でも、どうしてもご主人に聞きたいこと
があつて。

庫兵衛
城之内

漬物のことですね？

違います。この前来た時、岡田以蔵の話をしましたよね？あれからいろいろ
調べたんですが、岡田に刀を渡したやつはいまだに見つからない。そいつ
さえ見つかれば、岡田の居所がわかるのに。

庫兵衛

そう仰られても、私は何とも。

城之内

ご主人がこちらに店を出したのは、二年前だそうですね。

庫兵衛
城之内

ええ、そうですね。
実は昨日、烏丸の漬物屋でたくあんを買ったんですよ。その店の名前が、こ
ちらと同じ村山屋だった。まさかと思つて、番頭さんに聞いてみたら、「弓

弓
城之内

ええ、祇園の村山屋は、私の実家です。」つて。

城之内

(庫兵衛に)とすると、ご主人も以前はそちらに？

庫兵衛 城之内 いや、私は別の店で奉公を。
城之内 どの店です。やっぱり漬物屋ですか？
庫兵衛 いや、伏見の料亭です。
城之内 なんて名前の料亭ですか？ 一度、行ってみたいな。
庫兵衛 それが、今はもうないんです。一年ほど前に、潰れてしまいましたが。
城之内 それは残念だな。まあ、料亭に行けるほどの金は持ってませんけどね。
庫兵衛 かわりに、たくあんはいかがです。もちろん、お代は結構ですよ。
城之内 ご主人に一つ、お願いがある。私に漬物を勧めるのはもうやめてもらいたい。
弓 私、漬物は嫌いなんだ。
城之内 じゃ、どうして私の実家にたくあんを買いに行ったのですか？
庫兵衛 さあ、どうしてだったかな。じゃ、今日はこれで引き上げます。
城之内 弓、お土産を。
庫兵衛 だから、漬物はいらねえと言ってるだろう！
城之内 怒ることないでしょう。
庫兵衛 岡田の仲間は必ずこの近くにいます。必ず正体を暴いてみせますよ。もし何か
城之内 わかったら、屯所に来てください。私が屯所にいなかったら、宮川町の金田
庫兵衛 屋に。
城之内 金田屋？
庫兵衛 通りの入り口にある、足袋屋です。あ、そうそう。岡田以蔵が人斬りを始め
城之内 たのも、二年前なんですよ。おもしろい偶然ですね。それじゃ、また。

城之内が去る。

庫兵衛 何が、おもしろい偶然じゃ。弓、表に塩をまいてこい。
弓 あの人、もう何もかもわかつてるぞって顔をしてましたね。
庫兵衛 いやなやつに目をつけられたのう。もうすぐ戦が始まるつちゆう時に。

そこへ、青葉・亥三郎がやってくる。

亥三郎 松原さん、わしが片付けてくるぜよ。

庫兵衛 やめちよけ。またしくじったら、どねえするんじゃ。

亥三郎 しかし、放ってはおけんじやろう。今日は平気じゃ。相手は一人、こっちは

二人じゃから。

弓 青太郎さん。あなた、人を斬るのは初めてなんじゃないの？

青葉 ええ。でも、今の人は、父の敵の仲間です。覚悟はできました。

亥三郎 よし、その意気じゃ。行くぞ。

青葉・亥三郎が去る。

弓 大丈夫でしょうか。まだ子供なのに。

庫兵衛 二人とも斬られれば、死人に口なし。わしは捕まらずに済むんじやがのう。

弓 あなた。

庫兵衛 今のは冗談じゃ。亥三郎がやられるものか。

弓 でも、青太郎さんは？

庫兵衛 何とかなるじやろう。子供は子供じゃが、武士の目をしちよったけえ。

庫兵衛・弓が去る。
村山屋の近くの路上。城之内がやってくる。立ち止まる。

城之内 俺に何か用か。

そこへ、青葉・亥三郎がやってくる。

城之内 なんだ、おまえか。あれからずっと探してたんだぞ。しかし、自分から姿を

現すとは思わなかった。村山屋に呼び出されたのか？ 俺を斬れと。

わしはたまたま通りかかっただけじゃ。

嘘をつけ。村山屋は勤皇派だ。あの日、おまえに刀を渡したのも村山屋なん

だ。そうだろう、岡田以蔵。

おまん、何か勘違いしちよるようじゃのう。わしの名前は亥三郎じゃ。

いつ名前を変えた。武市が捕まって、一人になった時か。

青太郎、抜け。

何だ、その小僧は。

（青葉に）教えた通りにやるんじや。最初の一撃が肝心じゃぞ。

はい。（と刀を抜く）

ちよつと待てよ。俺には、小僧を斬る趣味はない。

なめるな！（と刀を城之内に向ける）

しようがないな。

城之内が刀を抜き、青葉に向ける。青葉は後ろへ退く。

亥三郎

(青葉に) 怯むな。相手の動きをよく見ろ。

青葉が城之内に斬りかかる。城之内がかわす。青葉が城之内に斬りかかる。城之内が避けて、青葉の刀を叩き落とす。亥三郎が刀を抜いて、城之内に斬りかかる。城之内がかわす。城之内が亥三郎に斬りかかる。亥三郎がかわす。

亥三郎

(青葉に) 逃げろ。後はわしが何とかする。

青葉

でも——

亥三郎

早くしろ!

青葉が走り出す。と、行く手に、黒江・末次が立ち塞がる。

末次

待て!

城之内

良かった。ちよつと手こずってたんですよ。しかし、どうしてここへ?

黒江

そういう貴様こそ、なぜここへ来た。手柄を独り占めしたかったのか。

城之内

違う。俺は——

黒江

良かろう。そいつはおまえに譲る。しかし、おまえの腕で勝てるか? 岡田

城之内

以蔵はすでに七人斬っている。八人目にならないように、せいぜい気をつけ

末次

しかし、城之内さんはちよつと手こずってたと——

城之内が亥三郎に斬りかかる。亥三郎がかわす。青葉が刀を拾って、黒江に向ける。

亥三郎 やめろ、青太郎！ そいつは手強い。

青葉が黒江に斬りかかる。黒江がかわして、青葉の腕をつかむ。亥三郎が黒江に体当たりする。青葉が黒江から逃げる。亥三郎が青葉の前に立つ。

亥三郎 （黒江に）こいつは雑魚じゃ。見逃してやってくれ。

末次 そうは行かん。

末次が青葉に斬りかかる。亥三郎が青葉を突き飛ばして、末次の腕を斬る。

亥三郎 （青葉に）逃げろ！

青葉が走り去る。黒江が後を追おうとする。が、亥三郎が斬りかかる。黒江がかわす。

城之内 黒江さん、そいつはあんたに譲る。

城之内が青葉の後を追って、走り去る。亥三郎が黒江に斬りかかる。黒江がかわして、亥三郎の肩を斬る。亥三郎が膝をつき、刀を落とす。

黒江 立て。

末次 黒江さん、俺にやらせてください。

黒江 何を。

末次
黒江

二度と逃げられないように、足を斬るんでしょう？ 俺に斬らせてください。その必要はない。(亥三郎に) その傷では、走ることもできまい。立て。

亥三郎が立ち上がる。末次が亥三郎の刀を拾う。その刀を亥三郎に向け、歩くように促す。
亥三郎・黒江・末次が去る。

前場のすぐ後。今熊野にある長屋の、亥三郎の部屋。青葉が走ってくる。

青葉
えんさん！ えんさん！

反対側から、えんがやってくる。

えん
そんなに怒鳴らなくても聞こえてるわよ。お婆ちゃんじゃないんだから。

青葉
大変なんです。亥三郎さんが新選組に――

えん
まさか斬られたの？

青葉
いいえ、私がいた時はまだ。でも、あの後、どうなったかは――

えん
結局、どっちなのよ。お願いだから、わかるように話して。あんたたち、稽

古に行つたんじゃないの？

青葉
いいえ、今日は村山屋に行つたんです。仕事をもらうために。

えん
殺しの仕事ね？ でも、どうしてあんたが一緒に？

青葉
亥三郎さんが、実戦を教えてやるって。

えん
そうか。で、新選組を斬れって言われたわけ？

青葉
違います。店で話をしていたところへ、新選組が来たんです。すぐに後を追

いかけて、道端で斬りかかったんですけれど、全然歯が立たなくて。そこへ、

えん あの平松がやってきて。
青葉さんの敵ね？
青葉 平松の剣はまるで稲妻のようでした。もう駄目だと思ったら、亥三郎さんが助けてくれて。
えん それで逃げてきたの？ うちの人を残して？
青葉 すみません。

えんが青葉を突き飛ばす。青葉が倒れる。

えん 謝って済むと思ってるの？ よく平気な顔で帰ってこられたわね。あんた、自分が何をしたかわかっているの？

青葉 ……

えん 何とか言いなさいよ。さんざん世話になった相手を、どうして見殺しにできたわけ？

青葉 でも、亥三郎さんは。

えん 何よ。

青葉 亥三郎さんの本当の名前は、岡田以蔵なんでしょう？

えん うちの人がそう言ったの？

青葉 いいえ。でも、新選組が亥三郎さんを岡田と呼んでいました。

えん ……

えん 亥三郎さんはもう七人も人を殺してるそうですね。そんなに強い人なら、相手が三人でも、何とかなるんじゃないですか？
えん そうやって、勝手な言い訳をこしらえて、逃げてきたんだ。(と笑う)

青葉
えん

青葉

えんが走り出す。

青葉
えん
青葉
えん
青葉
えん

青葉
えん

青葉

何がおかしいんです。

岡田以蔵のあだ名は、人斬り以蔵。殺した人間の数は七人どころじゃない。

その倍は殺してる。勤皇派一の剣の使い手よ。うちの人が、そんなに凄いなだと思おう？

でも。

どこへ行くんですか？

頼みに行くのよ。うちの人を助けてくれって。

誰に？

本物の以蔵。あんたと一緒に暮らしてる男よ。

鉄さんが？ まさか。

うちのひと鉄さんは、子供の頃から仲良しだったの。二人とも足軽の家に生まれて、同じように貧乏で。鉄さんは剣が強かったから、武市半平太に認められた。武市と一緒に都に上って、勤皇の志士になった。でも、うちの人

は土佐に置いていかれた。

え？ でも今は。後から一人で来たのよ。自分も志士になりたくて。うちの人

は鉄さんにくっついて回って、人斬りの手伝いをした。手伝いって言っても、見張りとか後

をつけたりとかだったけど、本人はうれしかったみたい。鉄さんは、うちの

人の憧れだったから。

でも、今はあんなに弱いのに。

えん

武市が捕まって、土佐に送られてからよ。鉄さんは武市の犬みたいなものだ
ったからね。飼い主がいなくなつて、急に怖くなつたんでしよう。名前を変
えて、藤田屋で働き始めた。うちの人は怒つたわ。「人斬り以蔵が、なんで
風呂の釜炊きなんぞせにやならんのじゃ」つて。

青葉
えん

それで、今度は自分が人斬りを？

勘違いしないでよ。うちの人は、人斬り以蔵のふりがしたかつたわけじゃな
い。ただ、昔の鉄さんみたいになりたかつただけなのよ。

青葉

そんな理由で、人を殺したんですか。

えん

偉そうなことを言わないでよ。うちの人を残して、逃げてきたくせに。

青葉
えん

謝るぐらいなら、助けに行つてよ。うちの人をここへ連れ戻してよ。それが
できないんだつたら、二度と顔を見せないで。

えんが去る。青葉が俯く。
二カ月前の夜。小田原にある、山下家の一室。春枝がやつてくる。

春枝

青葉、荷物はまとめた？

青葉

荷物つて？

春枝

岡山に持つていく荷物よ。今夜のうちにまとめておきなさいつて言つたでし
よう？

青葉

姉上、私はやつぱり、ここに残ります。

春枝

まだそんなことを言つてるの？ 確かに、父上は私たちに黙つて、お決めに
なつた。でも、子が親に従うのは当たり前のことでしょう？

青葉 春枝 青葉

でも、父上はこう仰いました。「いやなら、ついてこなくていい」って。それは、あなたが生意気なことを言うから。いいえ、あれは父上の本心です。私のことなど、どうでもいいと思っ

春枝 青葉

つしやるんです。そんなこと、あるわけじゃないの。

春枝

でも、私はいつも父上に叱られてばかりです。何をやっても、姉上みたいに上手にはできません。

春枝 青葉 春枝

青葉は覚えてないのね。何をですか？

小さい頃のあなたは、体が弱った。だから、父上はけっしてあなたを叱らなかつた。姉妹喧嘩をしても、叱られるのは私だけ。あなたばかりが可愛がられて、私は悔しかったの。

春枝 青葉

そんなこと、信じられません。

本当よ。母上が亡くなった時、あなたは泣いて泣いて、ご飯もろくに食べようとしなかつた。それを見て、父上はこう仰ったの。「もっと厳しく育てれば良かった」って。父上があなたを叱るのは、あなたに強くなつてほしいからなのよ。

そこへ、山下がやってくる。布包みを持っている。

山下 春枝 山下

なんだ。まだ起きていたのか。

お帰りなさいませ。

一月近い旅だ。今夜はたっぷり寝ておけと言っただろう。

春枝 すみませんでした。(青葉に) さあ、行きましよう。
山下 待て、春枝。明日から、これを身につけるがいい。

山下が布包みから懐剣を取り出して、春枝に渡す。

春枝 どうなさったんですか、こんな立派な物。

山下 金のことなら、案ずるな。岡山藩から支度金が出たんだ。

春枝 ありがとうございます。大切にします。

山下 今まで、いろいろ苦労をかけたな。おまえにまで、内職をさせて。

春枝 私は苦労とは思っていません。針仕事も覚えられましたし。

山下 いや、今日まで何とかやってこられたのは、おまえのおかげだ。感謝している。

青葉 姉上、私は先に休みます。

山下 待て、青葉。おまえにもやるものがある。

山下が布包みから簪を取り出して、青葉に渡す。

春枝 きれいな。(山下に) この簪、母上がつけていらっしやっただのとよく似ていますね。

山下 そう思ったから、買ってきたんだ。

春枝 どうしたの、青葉？ 父上にお礼を言いなさい。

青葉 こんな物、ほしくありません。

春枝 青葉。

青葉 (山下に)なぜこんな無駄遣いになるんです。ただでさえ、路銀が足りない

というのに。

春枝 聞いてなかったの？ その簪は、支度金で。

青葉 (山下に)私はいりません。返ってきてください。

山下 それはもうおまえの物だ。必要がないなら、捨てればいい。

春枝 父上。

山下 寝るぞ。おまえたちも早く休め。

山下が去る。

春枝 青葉、いい加減にしなさい。

青葉 だって、本当に無駄遣いだと思ったから。

春枝 父上のお気持ちが変わらないの？ きつとこの簪を買うために、何軒も探し

回ったのよ。

青葉 そんなこと、父上がなさるわけありません。

春枝 そうかしら。母上の簪を売ることになった時、あなたは泣いていやがったで

しょう？ それだけは売らないでくれて。

青葉 でも、聞いてもらえなかった。

春枝 あの時、他に道がなかったの。簪を売らなければ、次の日の食べ物を買え

なかつたんだから。父上だって、辛かったのよ。

青葉 だから、私のために？

春枝 そうよ。あなたのためよ。わかったら、お礼を言ってらっしゃい。

青葉 でも、今じゃなくても良かったんです。岡山に着いて、暮らしに余裕が出て

春枝

からでも。やっぱり、明日、返してきます。
明日じゃなくても、いいじゃない。お金がなくなつて、他に売る物がなくなつたら、その時売ればいい。私もそうするから。

青葉

(頷く)

春枝

さあ、もう休みましょう。

春枝が去る。青葉が簪を見つめる。

青葉

父上、あの時、生意気を口をきいて、申し訳ありませんでした。お礼を言わなくて、申し訳ありませんでした。素直な娘でなくて、申し訳ありませんでした。私は本当はうれしかったんです。この簪が。父上の娘であることが。

青葉が去る。

五月一日の夕方。藤田屋の裏庭。鉄蔵がやってくる。薪を抱えている。反対側から、巳之吉がやってくる。風呂敷包みを持っている。立ち止まって、後ろを振り返る。

鉄蔵 旦那さん、どこかへお出かけか？

そこへ、しまが走ってくる。

しま 巳之吉！ 待ちなさい！

巳之吉が走り去る。しまが後を追うが、つまずいて、転びそうになる。鉄蔵がしまを支える。

鉄蔵 女将さん、旦那さんはどこへ行ったんじや。

しま それは、私の方が聞きたいわ。これを見てよ。(と手紙を差し出す)

鉄蔵 (受け取って読む)「修行の旅に出ます。怒らないでください。巳之吉」

しま 何が、怒らないですよ。これが主人のすること？

鉄蔵 おかしいのう。旦那さんは、辰五郎さんの弟子になったはずじゃが。

しま なることはなかったけど、全然役に立たなくてね。お皿を洗わせれば、すぐに

えん 鉄蔵 えん 鉄蔵 えん 鉄蔵 かよ 鉄蔵 えん 鉄蔵 えん 鉄蔵

死んだのか、亥三郎は？
わからぬ。だから、助けに行つてほしいのよ。
それは無理ですよ。鉄蔵さんが新選組に勝てると思ひますか？
勝てるよ、鉄蔵さん？
悔しいが、かよさんの言う通りじゃ。わしには人が斬れん。刀を持っただけで、足が震えるんじゃ。
情けないこと、言わないでよ。人斬り以蔵ともあろう人が。
人斬り以蔵？ 鉄蔵さんがですか？
聞いてくれ、えん。わしは、昔とは違うんじゃ。人斬り以蔵と呼ばれた頃は、怖い物など何もなかつた。人を斬るのは、天子様のためじゃ。しくじつたところ、死ぬのは自分だけ。悲しむやつは一人もおらん。じゃけど、あの日、すべてが変わつた。
武市さんが捕まつた日ね？
違う。坂本さんに頼まれて、勝さんの護衛をした時じゃ。十人ぐらゐに囲まれて、わしは斬つて斬つて斬りまくつた。こんな所で死にたくない、勝なんぞのために死んでたまるかと思ひながら。敵が去つた後、納刀しようとしたら、刀を落とした。掌が濡れとつたんじゃ。
鉄蔵さんも斬られたの？
いや、汗じゃ。斬り合いをして、汗をかいたのは、初めてじゃつた。当たり前よ。わしはその時、やつと気づいたんじゃ。死ぬというのがどういふことか。死んだら、それで終わりじゃ。後は何もない。死んでも構わん？ そんなのは嘘じゃ。
でも、鉄蔵さんは死ななかつたじゃない。

鉄蔵

わしに助けられるわけがない。じゃけど、命懸けでやれば、あるいは。

鉄蔵が去る。えんが鉄蔵の背中に頭を下げる。

しま

大丈夫よ。鉄さんは、きつと二人を連れて帰ってくる。

かよ

女将さんは知ってたんですか？ 鉄さんが人斬り以蔵だって、

しま

まさか。でも、これを見て。(と薪を持って) みんな、きれいに真つ二つ。

かよ

見た目は弱そうだけど、本当は強いんじゃないかと思ってたのよ。

えん

私は全然、気がつきませんでした。

しま

すみませんが、お水を一杯、いただけますか。

かよ

お水より、お茶にしませんか？ 良かったら、座敷へどうぞ。

えん・しま・かよが去る。

河原町にある、足袋屋の離れ。亥三郎・黒江・末次がやってくる。亥三郎は縄で縛られている。黒江は酒瓶と包帯を持っている。末次が亥三郎を突き飛ばす。亥三郎が倒れる。

亥三郎

痛い。怪我人を粗末に扱うな。

末次

怪我人はおまえだけじゃない。この傷は誰の仕業だ。

亥三郎

わしじゃ。すまんかったのう。おまんを斬るつもりはなかったんじゃ。

黒江

末次、傷を見せてみろ。

末次

(袖をめくって) 大したことはありません。もうあまり痛まないし。

黒江

しかし、消毒はしておいた方がいい。(と手当てを始める)

亥三郎

わしは手当てしてくれんのか。

黒江 三郎
末次

末次 三郎

末次 三郎

末次 三郎

末次 三郎

末次 三郎

末次 三郎

末次 三郎

末次 三郎

殺されなかつただけ、ありがたと思え。

(周囲を見て) なかなかいい部屋じゃのう。どうやって借りたんじゃ。この主人は、俺の親父の知り合いなんだ。俺の親父は、神田で足袋屋をやつていて。

なんじゃ。おまん、商人の出か。

八人兄弟の末っ子だ。小さい頃から目立たない子供で、親父にもなかなか名前を覚えてもらえなかつた。飯の時、俺だけ呼ばれなかつたこともある。いつかは名を揚げて、見返してやる。そう思って、都へ来たんだ。誰がおまへの生い立ちを話せと言つた。

でも、聞かれたから。

おまんもいろいろ苦労しちよるんじゃのう。ああ、喉が乾いた。

焼酎で良ければ、これを飲め。(と酒瓶を差し出す)

末次、こいつはおまへの腕を斬つた男なんだぞ。

でも、さっき謝ってくれたから。

(黒江に) おまんは、わしに話が聞きたいんじやろう? じゃつたら、酒ぐ

らい飲ませえ。

それは、話が終わつてからだ。(末次に) よし、これでいいだろう。

ありがとうございます。

(末次に) さつき、おまえと一緒にいた男は誰だ。

青太郎のことか? わしも詳しいことは知らんが。

家はどこだ。

知らん。実は、昨夜、飲み屋で知り合うたばかりで。

黒江が亥三郎を殴る。

末次 黒江さん！

亥三郎 (黒江に) おまん、つくづく気が短いのう。

黒江 言え。あいつはどこにいる。

亥三郎 じゃから、知らんと言うちよるじゃろう。

黒江が亥三郎を殴る。亥三郎が気を失う。黒江が亥三郎の襟をつかむ。

黒江 おい、起きろ。

末次 黒江さん、やめてください。気を失ってるじゃないですか。

黒江 水を持ってこい。早くしろ！

そこへ、城之内がやってくる。

城之内 何をやってるんだ、黒江さん。

黒江 おまえ一人か？ あいつはどうした。

城之内 祇園の辺りで見失った。意外とすばしっこくて。

黒江 それでこのこ戻ってきたのか。おまえというやつは、どこまで間抜けなん

末次 だ。(と歩き出す)

黒江 どこへ行くんです。

城之内 藤田屋だ。あの娘、やっぱり藤田屋に隠れてたんだ。

誰の話をしてるんだよ。

黒江 末次 黒江 山下の？ しかし、なぜ山下の娘がこいつと一緒にいたんです。

黒江 末次 黒江 それは本人に聞けばわかることだ。おまえらはこいつを見張っている。

黒江 末次 黒江 末次さん、俺たちも行こう。しかし、黒江さんは見張っている——

黒江 末次 黒江 その必要はない。俺はここで待っていると言ったんだ。

黒江 末次 黒江 うわー！ 何だ何だ。もういやだ！ これ以上、我慢できない！ 黒江さんが見張っていると言え

黒江 末次 黒江 ば、城之内さんは行こうと言う。黒江さんがきつねそばと言えば、城之内さん

黒江 末次 黒江 ンは讃岐うどんと言う。俺は一体、どうすればいいんだ！

黒江 末次 黒江 いや、俺は別にあんたを困らせるつもりはなくて——

黒江 末次 黒江 馬鹿馬鹿しい。俺は行くぞ。

黒江 末次 黒江 馬鹿馬鹿しい？ 俺のこの苦しみは、そんなに馬鹿馬鹿しいことですか？

黒江 末次 黒江 とんでもない。今まで気づかなくて、本当にすみませんでした。

黒江 末次 黒江 わかってくればいいんです。それで、俺たちはどうします。やっぱり、こ

黒江 末次 黒江 こで待ってますか？

黒江 末次 黒江 いや、黒江さんの後を追おう。どうも様子が変だ。

城之内
末次

俺たちは人斬り以蔵を捕まえたんだぞ。なぜすぐに屯所へ連れていかない。それは、俺が怪我をしたからですよ。屯所へ行く前に、手当てをしようって

城之内

言ってくれて。しかし、手当てはもう終わったんだろう？ それなのに、以蔵を放り出して、

末次

山下の娘を捕まえに行った。

城之内

山下ってやつは、こいつより大物だったのかもしれないよ。

末次

だからって、いきなり斬り殺すか？ しかも、娘まで。

城之内

黒江さんは強すぎるんです。自分の剣に自信があるから、ついやりすぎてしま

城之内

まう。沖田さんもそう言った。実を言うと、前から沖田さんに頼まれてたんだ。

末次

黒江さんが暴走しそうになったら、止めてくれて。

城之内

やっぱ、後を追いかけますか？

末次

その方がいい。黒江さんはあの娘を殺すつもりだ。理由はわからないが。

城之内

前の場のすぐ後。足袋屋の離れ。青葉が走ってくる。刀を抜いている。

青葉
城之内
動くな！
驚いたな。せつかく逃げたのに、戻ってくるとは。まさか、こいつを助けに

末次
来たのか？
探しに行く手間が省けましたね。（と刀を抜く）

青葉
聞こえなかったのか？ 私は動くなと言ったんだ。

末次
黙れ。小娘が偉そうな口を叩くな。

青葉
私は男だ。

末次
芝居はやめろ。おまえが山下の娘だってことは、もうわかっているんだ。

城之内
しかし、なぜ一人で来るのかな。（青葉に）おまえの腕で、俺たちに勝てる

青葉
と思ってるのか？

城之内
思っていない。でも、その人を見殺しにするわけにはいかないの。

青葉
だから、死んでも構わないというわけか。じゃ、死ぬ前に教えてくれ。おま

末次
えの父親は何者なんだ。密書には何を書いてあったんだ。

青葉
教えたら、その人を助けてくれる？

末次
つべこべ言わずに、答える。答えないと――

亥三郎が起き上がり、末次に体当たりする。末次が倒れる。

青葉

亥三郎さん！

亥三郎

青葉さん、逃げるんじゃ！

青葉

でも——

城之内が亥三郎に歩み寄る。亥三郎が城之内に体当たりする。城之内がかわす。末次が起き上がり、亥三郎を殴る。亥三郎が倒れる。城之内が刀を抜き、亥三郎に向ける。

城之内

狡いな。ずっと寝たふりをしてたのか？

亥三郎

（青葉に）べこのかあ。なんで逃げんのじゃ。

城之内

俺はこういうやり方は好きじゃないんだが。（と刀を亥三郎の首に当てて、

亥三郎

青葉に）さっきの質問に答えてもらおう。密書には何が書いてあったんだ。

城之内

答えられるわけないろうが。密書なんぞ、最初からなかったんじゃから。

青葉

何だと？

末次

その人の言う通りよ。あなたたちは平松に騙されたの。

亥三郎

平松って誰だ。

青葉

まだ気づかんのか。おまんらが黒江と呼んどる男じゃ。

末次

（末次に）あいつの本当の名前は平松。元小田原藩士で、私の父の部下だったの。

亥三郎

でたらめを言うな。黒江さんは俺と同じ江戸の生まれだ。

末次

そう言われて、素直に信じたんか。げにまっことめでたい男じゃのう。

末次

城之内さん、そこをどいてください。俺にはそいつが許せない。

城之内

気持ちにはわかるが、我慢してくれ。俺は、今の話の続きが聞きたい。（青葉に）聞かせてくれたら、こいつは見逃してやろうじゃないか。

末次

勝手なことを言わないでください。

青葉
城之内

（城之内に）わかった。でも、先にその人を外へ出して。いいだろう。

城之内が青葉に打ちかかる。青葉が刀を落とす。城之内が青葉の首に刀を当てる。

亥三郎

貴様！

城之内
亥三郎

狡いなんて言わないでくれよ。先に寝た振りをしたのは、おまえだからな。クソ！

亥三郎が起き上がり、城之内に体当たりしようとする。末次が亥三郎をつかみ、殴る。亥三郎が倒れる。

城之内

（青葉に）ゆっくり聞かせてもらおうじゃないか。小田原の頃の話。

そこへ、鉄蔵がやってくる。

鉄蔵

待ってくれ。

青葉
鉄蔵

鉄さん。
（城之内に）その娘に手を出さんでくれ。頼む。

城之内

何だ、おまえは。

末次 確か、藤田屋で働いてる男です。
城之内 ますます訳がわからないな。そんなやつがなぜここに來るんだ。
亥三郎 鉄さん、無理じゃ。今のあんたじゃ、こいつらには勝てん。
鉄蔵 そんなことはわかっちゃよる。じゃから、こうして頼んどるんじゃ。
末次 出ていけ。おまえの相手をしてゐる暇はない。
鉄蔵 (土下座して) 青葉さんと亥三郎を放してやってくれ。この通りじゃ。
末次 なんだ、その恰好は。武士のくせに、情けないとは思わないのか？

末次が鉄蔵に歩み寄る。鉄蔵が末次の腕をつかみ、腹を殴る。末次が倒れる。城之内が鉄蔵に斬りかかる。鉄蔵がかわす。末次が鉄蔵に斬りかかる。鉄蔵がかわして、末次の腕をつかみ、捻り上げる。

末次 痛い痛い痛い！
鉄蔵 亥三郎、青葉さんを連れて、外へ出ろ。
亥三郎 大したもんじゃ。まるで、昔に戻ったようじゃのう。
青葉 (鉄蔵に) あなた、本当に岡田以蔵だったんですね？
城之内 何だと？
鉄蔵 (青葉に) 平松が戻ってくるかもしれん。急げ。

青葉・亥三郎が去る。鉄蔵が末次を城之内に向かって、突き飛ばす。末次が倒れる。鉄蔵が走り去る。城之内が後を追う。弓がやってくる。後から、庫兵衛がやってくる。

庫兵衛

どうした、弓。

弓

今、表の方で鉄さんの声が。

庫兵衛

鉄じゃと？ あいつがうちに来るわけないじやろう。

弓

でも、似てました。ちよつと見てきます。

庫兵衛

いや、わしが行こう。おまえは蔵へ行つて――

弓

鍵を確かめてくるんですね？ わかつてます。

弓が去る。反対側へ、庫兵衛が去る。

城之内が戻ってくる。末次の肩をつかんで揺さぶる。

城之内

末次さん、しつかりしろ。

末次

良かった。死んだのは俺一人じゃなかったんですね。

城之内

落ち着け。あんたはまだ生きてる。

末次

(腕を触って)痛い！ 本当だ。まだ傷が痛い。

城之内

あいつらの後を追うんだ。行き先はおそらく、藤田屋。

城之内・末次が去る。

村山屋の座敷。庫兵衛がやってくる。後から、青葉・鉄蔵・亥三郎がやってくる。

鉄蔵

すまんのう、いきなり押しかけてきて。

庫兵衛

亥三郎だけじゃつたら、すぐに追い返しちよつた。じゃけど、おまえも一緒

となつたら、話は別じゃ。

青葉

お二人は前からお知り合いだったんですか？

庫兵衛

こうして会うのは、去年の八月以来じゃがな。それまでは、何度も仕事を手伝ってもらった。

亥三郎
庫兵衛

(青葉に) わしは、鉄さんの二代目というわけよ。

二代目はしくじってばかりじゃが、一代目は強かった。(鉄蔵に) おまえがまたやる気になるを待ちよっんじや。

鉄蔵

それは誤解じゃ。わしにはもう殺しはできん。

亥三郎

そんなことはない。さっきじゃって、いつぺんに二人も倒したじゃろうが。

(と倒れる)

青葉

亥三郎さん！

そこへ、弓がやってくる。

弓
鉄蔵

やっぱり、鉄さんだったんですね？ お久しぶりです。

すまんが、挨拶をしている暇はない。亥三郎が怪我をしちよるんじや。手当てをしてやってくれんか。

亥三郎

その必要はない。ただのかすり傷じや。

鉄蔵

嘘をつけ。この汗はなんじや。

(亥三郎に歩み寄り、傷口を見て) かなり深いですね。昼間来た、城之内様の仕業ですか？

亥三郎

いや、平松じや。新選組では、黒江と名乗っちよるが。

弓

黒江？ その方なら、以前、うちの店に来ましたよ。

鉄蔵

その話の後じや。早う、手当てをしてやってくれ。

弓

わかりました。(と行こうとする)

庫兵衛 鉄蔵
庫兵衛 青葉
庫兵衛 弓
庫兵衛 青葉
庫兵衛 鉄蔵
庫兵衛 鉄蔵
庫兵衛 鉄蔵
庫兵衛 鉄蔵

待て、弓。(鉄蔵に) おまえは今、なんと言った。殺しはできんと言ったのか？

ああ。わしはもう昔には戻れん。亥三郎と青葉さんを助け出すだけで、精一杯じゃ。

青葉つちゆうんは誰じゃ。

私です。私の本名は、山下青葉です。

え？ あなた、女子なの？

嘘について申し訳ありませんでした。どうしても、敵が討ちたくて。

敵？

私の父と姉は、平松に殺されたんです。

ところが、返り討ちに遭って、鉄に助け出されたというわけか。

ここへ連れてきたのは、他でもない。青葉さんを匿ってほしいんじゃ。一晩でええから。

その後はどうするんです？ 他に匿ってくれそうな人はいるんですか？

心配はいらん。朝になったら、青葉さんは都を出る。小田原へ帰るんじゃ。

私は帰りません。平松を殺すまでは。

でも、あなたに仇討ちは無理よ。

青葉さん一人では無理じゃろう。わしが手伝うても、まだ難しい。じゃけど、

鉄さんが手伝ってくれれば――

何度言うたら、わかるんじゃ。わしにはもう殺しはできん。

ちゆうことは、わしを手伝う気もないつちゆうことか。

ああ。

出ていけ。

弓
庫兵衛
亥三郎
庫兵衛

あなた。
おまえらを匿っても、わしには何の得もない。今すぐ、出ていけ。
わしらを見捨てるのか？

昼間、大事な計画があると言ったじゃろう。鉄なら、計画の役に立つ。そう
思ったから、中に入れたんじゃ。しかし、鉄にその気がないという。じゃつ
たら、おまえらは用なしじゃ。

じゃから、その計画つちゆうのは何なんじゃ。
戦を起こすんです。長州藩を中心とした、勤皇派の諸藩が。

弓
庫兵衛

馬鹿。なぜこいつらに言うんじゃ。

鉄蔵
庫兵衛

今の長州が幕府に勝てるか？

心配するな。天子様を長州へお連れすれば、さすがの幕府も諦めるじゃろう。
ええか。わしらにとつては、今が正念場なんじゃ。仇討ちなんぞにかかわつ
ちよる暇はないんじゃ。それがわかったら、とつとと出ていけ。二度とここ
へは来るな。

弓

あなた。

鉄蔵
亥三郎

わかった。行くぞ、亥三郎。(と亥三郎に肩を貸して、立たせる)
邪魔したのう。

青葉・鉄蔵・亥三郎が去る。

庫兵衛
弓
庫兵衛

わしも出かける。おまえは店の者を使って、銃をまとめておいてくれ。
別の場所へ移すんですか？
明日あたり、また新選組が来るじゃろう。その時、蔵の中を見せろと言われ

弓
庫兵衛

弓
庫兵衛

庫兵衛

弓

庫兵衛

弓
庫兵衛

庫兵衛が走り去る。弓も後を追う。

たら、どうする。
でも、千丁もの銃を、どこへ？

わしらの同志が、木屋町で古道具屋をやっちよる。主の名は枅屋喜右衛門。
というの表向きで、本名は古高俊太郎。

その方に頼んでみませんか？ 銃と一緒に、青葉さんも預かってくれと。
なぜわしがそんなことをする必要がある。

鉄さんと亥三郎さんのためですよ。お二人は、今日まで長州のために働いて
くれました。あなたにとつては、大事なお仲間のはずです。それとも、ただ
の道具だったと言うんですか？

しかし、あの娘を助けてやっても、一文の得にもならんぞ。
すつかり、都の人間になつてしまいましたがね。あなたの大嫌いな。

何じゃと？

こんな時まで、金勘定。見事にこぶうに暮らして居るじゃないですか。
わしがこぶうに暮らして居るじゃと？ わしが都の人間じゃと？ クソー！

あなたは武士じゃ。長州藩士、松原誠之進じゃ。

前の場のすぐ後。藤田屋の裏庭。鉄蔵・青葉・亥三郎がやってくる。

鉄蔵 女将さん！ 女将さん！

そこへ、かよがやってくる。

かよ 鉄蔵さん。

鉄蔵 ああ、かよさん。すまんが、女将さんと呼んできてくれんか。預けちよった荷物を取りに来たんじゃ。

かよ 荷物って？

青葉 父の刀と、姉の懐剣です。

かよ 誰よ、あんた。

鉄蔵 わからんのか。青葉さんじゃ。

亥三郎 (かよに) ついでに、えんも呼んできてくれ。ここにいるんじやろう？

青葉 亥三郎さん、顔色が真っ青ですよ。

亥三郎 悔しいが、立っているだけで、精一杯じゃ。

鉄蔵 もう少しの辛抱じゃ。(かよに) 早う、二人を呼んできてくれ。逃げて。

鉄蔵
かよ

え？
いいから、逃げて。早く！

そこへ、黒江がやってくる。

黒江

(かよに) 女、俺は中に入れると言ったはずだ。

亥三郎

貴様！(と刀に手をかける)

鉄蔵

待て、亥三郎。

黒江

城之内から聞いたぞ。まさか、貴様が以蔵だったとはな。正直な話、ほっと

亥三郎

した。(亥三郎に) 貴様が以蔵では、あまりに齒ごたえがないからな。
何じゃと。(と刀を抜く)

そこへ、城之内が飛び出す。

城之内

待て！ 刀を引け！

黒江

邪魔するな、城之内。こんなやつら、俺一人でたくさんだ。

城之内

あんたが強いのはよくわかった。しかし、俺はそいつらに話が聞きたいんだ。
無闇に殺されては困る。(奥に向かって) 末次さん。

そこへ、えん・しまが飛び出す。後から、末次がやってくる。

えん

(亥三郎に) あんた！

亥三郎

(末次に) これが新選組のやり方か。

末次 俺たちだつて、女子を斬りたくはない。刀を下に置け。
鉄蔵 早うせんか、亥三郎。
亥三郎 しかし——
鉄蔵 べこのかあ。えんがどうなつてもええがか。

亥三郎が刀を下に置く。

城之内

(青葉に) あんたも刀を置け。

青葉

(刀に手をかけて) いやです。

しま

青葉さん、言う通りにして。

青葉

私にはどうしてもその男が許せないんです。

黒江

俺を斬ると言うのか? だったら、すぐにかかってこい。

かよ

落ち着いて、青葉さん。

黒江

(青葉に) どうした。威勢がいいのは口だけか。

青葉が刀を抜いて、黒江に斬りかかる。黒江がかわして、刀を抜く。城之内が黒江の前に出て、青葉に斬りかかる。青葉が刀を落とす。

黒江

そんなに手柄がほしいのか、城之内。

城之内

違う。あんたにそいつを斬らせたくないだけだ。

黒江

最初に斬りかかってきたのは、そいつの方だ。

城之内

それは、あんたがそうするように仕向けたからだ。

黒江

馬鹿を言うな。そいつは俺が父親の敵だと思つてる。俺の命がほしくてほし

城之内

末次

城之内

くて堪らないんだ。
お互い様じゃないか。あんたはそいつの命がほしくてほしくて堪らない。なぜなら、あんたの小田原時代を知ってるからだ。
城之内さん、そいつの言うことを信じるんですか？
信じたくはない。しかし、黒江さん、あんたはおかしい。俺たち、新選組の役目は、市中警護だ。手当たり次第に斬ることじゃない。

黒江

城之内

黒江

（笑う）
なぜ笑う。

これが笑わずにいられるか。俺がおかしいだと？ 冗談も休み休み言え。おまえは何のために、都へ来た。剣で名を揚げたためではないのか。都の人間なら、人斬り以蔵の名は誰もが知っている。それはなぜだ。以蔵がたくさんの人間を斬ったからではないのか。

青葉
黒江

それじゃ、小田原で斬ったのも――
堀内か。あいつは俺より弱かった。それなのに、剣術指南役に使われたのはあいつで、俺ではなかった。俺の家が低いから、ただそれだけの理由で、選ばれなかったんだ。しかも、あいつは、俺が惚れていた女を妻にした。俺から、何も奪ったんだ。

好きだった人まで殺したの？ どうしてよ。
あいつを斬る邪魔をしたからだ。殺せと言うから殺したんだ。

えん
黒江

城之内

俺は武士だ。武士の仕事は敵を斬ること。敵を斬って、名を揚げる。俺はそのために、都へ来たんだ。
それじゃ、認めるんだな？ あんたの本名が、平松だと言うことを。

黒江 沖田さんに言うつもりか？
城之内 仕方ないだろう。新選組に、罪人を置いておくわけにはいかない。

黒江が城之内に斬りかかる。城之内がかわす。黒江が城之内の肩を斬る。城之内が倒れる。

末次 黒江さん、何をするんです。

黒江 城之内は以蔵を捕まえようとして、斬られた。沖田さんにはそう言うんだ。

いいな？

末次 そんな。

黒江 俺に逆らうやつは容赦しない。たとえ、同志であってもだ。

黒江が城之内に斬りかかる。城之内がかわす。青葉が黒江に斬りかかる。黒江がかわして、青葉に斬りかかる。青葉が転んで、倒れる。

しま やめて！

黒江 父親の仇討ちか。見上げた根性だな。しかし、これだけは覚えておけ。山下

は、死んで当然だったんだ。

なぜですか。

青葉 あいつは屯所に来て、俺に言った。小田原へ帰って、裁きを受けろと。馬鹿な男だ。俺はもう平松ではない。黒江だ。新選組に入って、俺は生まれ変わった。三年経ったら、知らない者はいなくなるぞ。黒江という名を。

そこへ、巳之吉が飛び出す。刀と脇差を持っている。

巳之吉

いい加減にしろ！

しま

巳之吉、あんた、いつ戻ってきたのよ。

巳之吉

たった今だよ。どこの料亭へ行っても、雇ってもらえなくて。

かよ

旦那さん、その刀は？

巳之吉

山下様の刀だ。新選組、よく聞け。ここは俺の旅籠だ。俺の旅籠で、人を斬

黒江

らせるわけにはいかない。(と脇差を抜いて、黒江に向ける)
町人の分際で、偉そうな口を叩くな。

黒江が巳之吉に刀を向ける。と、末次が黒江に刀を向ける。

末次

黒江さん、もうやめてください。

黒江

貴様、俺を裏切るつもりか？

末次

そうじゃない。これ以上、死人を増やしたくないだけだ。

城之内

末次さん、加勢するぜ。(と黒江に刀を向ける)

亥三郎

わしもじゃ。(と黒江に刀を向ける)

えん

あんた、脇差を貸して。(と脇差を抜いて、黒江に向ける)

青葉も黒江に刀を向ける。

黒江

おもしろい。六人まとめて、始末してやる。

黒江が末次に斬りかかる。末次がかわす。城之内が黒江に斬りかかる。黒江がかわす。と、鉄蔵が巳之吉の手から刀を取り、黒江に打ちかかる。黒江がかわす。

青葉
鉄蔵

鉄さん。
(黒江に) 六人ではない。七人じゃ。

鉄蔵が刀を抜いて、黒江に向ける。

黒江

どうした。剣が震えてるぞ。

鉄蔵

おまんはわしにそっくりじゃ。人斬り以蔵と呼ばれた頃のわしに。

黒江

貴様に俺の何がわかる。

鉄蔵

全部じゃ。おまんは自分が嵐だと思うちよる。邪魔なものはみんな吹き飛ばす。それが当たり前じゃと思うちよる。

黒江

四の五の言わずにかかってこい。それとも、俺が怖いのか？

鉄蔵

ああ、怖い。嵐の中に飛び込んだら、死ぬかもしれんからう。じゃけど、

黒江

平松。嵐は必ず過ぎ去るんじゃ。

黒江が鉄蔵に斬りかかる。鉄蔵がわかす。黒江がさらに斬りかかる。鉄蔵がかわす。激しい斬り合い。が、鉄蔵の一撃で、黒江が刀を落とす。鉄蔵が斬りかかる。黒江が転ぶ。鉄蔵がさらに黒江に斬りかかる。黒江が転がる。

亥三郎

どうした、鉄さん。さっさと斬ってしまえ。

鉄蔵

すぐには斬らん。(黒江に) まずは足じゃ。逃げられんように、右も左も、足首から下を斬り落とす。そうしたら、次は手じゃ。刀が持てんように、指を一本ずつ斬り落とす。その頃には、さすがに我慢できんようになって、痛い痛い泣き喚くじゃろう。じゃから、次は舌じゃ。次は耳。次は鼻。次は目。

黒江

俺をなぶりものにするつもりか。

鉄蔵

どうじゃ、自分が殺される気分は。

黒江

斬るなら、一思いに斬れ。

鉄蔵

いや、斬るのはわしではない。青葉さんじゃ。(青葉に) さあ、父上と姉上の仇討ちじゃ。思う存分、斬り刻んでやれ。

青葉が黒江に歩み寄る。刀を構える。が、刀を振り下ろさない。

玄三郎

どうしたんじゃ、青葉さん。

青葉

(刀を下ろす)

鉄蔵

そうじゃ。あんたには斬れん。斬ったら、そいつと同じ人間になるからもう。

青葉

(頷く)

城之内

城之内さん、じゃったな。そいつの命はおまんに預ける。そのかわり——

末次

わかつてるよ。あんたたちは見逃してやる。

城之内

沖田さんなんて報告するんですか？

鉄蔵

ありのままを言うさ。あの人なら、わかつてくれる。(鉄蔵に) ただし、見逃すのは一回だけだ。次に会った時には、必ず捕まえてやる。

鉄蔵

わかっちゃうよ。

城之内　　もつとも、俺があんたに勝てるわけがないがな。(黒江に) 立て。

黒江が立ち上がる。黒江・城之内・末次が去る。

しま　　巳之吉、あんた、いつまでそんなものを持つてるのよ。

巳之吉　　ああ、怖かった。死ぬかと思った。

かよ　　良かった。(と泣き出す)

しま　　何よ。いきなり泣き出して。

かよ　　だって、旦那さんにもしものことがあつたら、私は。

しま　　おまえ、まさか、巳之吉のことを？

巳之吉　　驚いたな。姉さん、俺に春が来たよ。

しま　　かよ、私は考え直した方がいいと思うよ。

亥三郎　　青葉さん、本当にこれで良かったんか？

青葉　　(頷く)

亥三郎　　クソー、わしに任せてくれれば、八つ裂きにしてやったのに。(と倒れる)

青葉　　亥三郎さん！

えん　　(亥三郎に駆け寄って) あんた。すっかりして。

しま　　気を失ってるわ。かよ、巳之吉の部屋に布団を敷いて。それから、お医者様

かよ　　を呼んできて。

かよ　　はい、ただいま。

巳之吉　　かよ、俺も手伝うよ。初めての共同作業だな。

かよが去る。巳之吉が亥三郎を背負って、去る。青葉・えんも去る。

鉄蔵

しま

鉄蔵

しま

鉄蔵

そこへ、庫兵衛が走ってくる。刀を差している。

庫兵衛

鉄蔵

庫兵衛

しま

鉄蔵

庫兵衛

しま

庫兵衛

鉄蔵

庫兵衛

鉄蔵

女将さん、長い間お世話になりました。

何よ。あんた、うちを辞めるっていうの？

新選組は、わしがここにいることを知った。城之内が来なくても、いずれは

誰かが捕まえに来るじやろう。

あんたも青葉さんみたいに、姿を変えたら？ 頭を剃るとか、断食して痩せ

るとか。

それは無理じゃ。これ以上、面倒をかけたくもないし。

鉄！ 助けに来たぞ！

一足遅かったのう。もう斬り合いは終わったぜよ。

何じやと？

あの、あなたは？

東山にある、村山屋という漬物屋のご主人じゃ。

違う。わしは長州藩士、松原誠之進じゃ。で、黒江はどうしたんじゃ。わし

が来るのを恐れて、逃げたのか。

違います。鉄さんが倒したんです。

鉄が？（鉄に）おまえが斬り合をしたのか。

ああ。しかし、今日だけじゃ。もう二度とやらん。

なぜじゃ。

あいつを見て、やっとわかったんじゃ。わしも嵐じゃ。嵐は過ぎ去るしかな

い。(と歩き出す)

しま
どこへ行くの？

鉄蔵
さあもう。足の向くまま、気の向くままじゃ。

庫兵衛
わしらの計画に加わらんか。

鉄蔵
それはやめちよこう。斬り合いはもうたくさんじゃ。

しま
青葉さんに黙って行くの？

鉄蔵
その方がええ。別れを言うのは照れ臭い。女将さん、松原さん、お元気で。

鉄蔵が去る。そこへ、かよがやってくる。

かよ
女将さん、雨です。

庫兵衛・しま・かよが空を見上げる。しま・かよが去る。

次の日の早朝。藤田屋の前の路上。弓がやってくる。傘を差している。

弓

あなた、濡れますよ。(と庫兵衛に傘を差しかける)

庫兵衛

はあ、ええ。大分、小降りになってきたけえ。ところで、鉄砲は？

弓

全部、運び終わりました。古高様があなたによろしくと。

庫兵衛

後は祇園会を待つばかりか。弓、一つ、おまえに話しておくことがある。

弓

わかっていますよ。あなたも軍に加わっていうんでしよう？

庫兵衛

昨日までは、そんなことは少しも考えちよらんかった。わしの役目は武器

を調達すること。戦うのは、他のやつらの役目じゃと。しかし、わしも武士なんじゃ。

弓

あなたのしたいようにしてください。私はいつまででも待ってますから。

庫兵衛

わからんやつじゃのう。わしは死ぬかもしれんのじゃ。いや、間違いなく、

死ぬ。離縁状を書けえ、実家へ帰れ。

それだけはお断りします。

弓。

あなたは死にませんよ。きっと、無事に帰ってきます。

庫兵衛

弓。(と手を握ろうとする)

庫兵衛

そこへ、亥三郎・えんがやってくる。二人とも旅装をして、傘を差している。

亥三郎

庫兵衛

弓

えん

亥三郎

えん

庫兵衛

えん

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

庫兵衛

亥三郎

弓

えん

亥三郎

えん

松原さん、何をしちよるんじや？

クソー。これからええ所じやったのに。

（亥三郎に）具合はいかがですか？ まだ顔色が良くないみたいですけど。

お医者様の話だと、熱が下がるまで、寝ていた方がいいって。

そんなのんびりしたことは言うてられん。城之内を疑うわけではないが、いつ新選組が来るかわからんからのう。一刻も早く、都を出んど。

（庫兵衛に）お借りした路銀は、なるべく早くお返ししますから。

その必要はない。あれはわしからの餞別じや。

え？

青葉さんを送り届けたら、そのまま二人で江戸へ行け。江戸で一から出直すんじや。

いや、わしは帰ってくるぜよ。

亥三郎。

長州はもうすぐ戦を起こすんじやろう？ わしも軍に加えてくれ。

断る。

断られても、加わるぜよ。わしは誰かの役に立ちたい。黒江のようにはなり

とうないんじや。

えんさんはどうするんですか？

私は江戸へ行きますよ。江戸で、新しい男を捕まえます。

えん、今のは本気か？

戦を取るか、私を取るか。小田原に着くまで、じっくり考えなさい。

そこへ、青葉・しま・巳之吉・かよがやってくる。青葉・しま・巳之吉は傘を差している。かよは巳之吉の傘の中に入っている。青葉は娘姿に戻り、旅装をしている。

巳之吉

皆さん、お待たせしました。

かよ

青葉さんたら、元の姿に戻っただけなのに、恥ずかしがっちゃって。

弓

(青葉に) 何だか、違う人みたい。その着物、よく似合ってますよ。

しま

そうでしょう？ 私が青葉さんぐらいの頃に着てたものなんですよ。

亥三郎

わしは男の着物の方が似合うと思うがのう。

えん

余計なことを言うんじゃないの。青葉さん、そろそろ行こうか。

青葉

はい。でも。

庫兵衛

気になるんか、鉄のことが。

青葉

いいえ。

庫兵衛

かわいそうじゃが、あいつはもう都にはおらん。今頃は、神足か大山崎の辺

亥三郎

りまで行つちよるじゃろう。

庫兵衛

鉄さんは、大坂へ行くと言うたんか？

えん

いや、何も言うちよらん。じゃけど、あいつは土佐へ向かったはずじゃ。人

庫兵衛

つちゆうのはおかしなもんでのう。いよいよ最期が近くなると、一目でええ

えん

から故郷の景色が見たい、そう思うようになるんじや。

庫兵衛

最期って？
わからんのか。鉄は死ぬつもりなんじや。

そこへ、鉄蔵がやってくる。他の人々に気づかれないように、腰を低くして、歩く。

弓
しま

嘘です。鉄さんが死ぬなんて。でも、あの人は言っていました。「わしも嵐じゃ。嵐は過ぎ去るしかない」つて。

亥三郎

嵐は過ぎ去るしかない、か。しかし、わたしにはすぐ近くにおるような気がするんじやがのう。

巳之吉

え？ そうかなあ。

かよ

なぜ気がつかないんです。旦那さんのすぐ後ろですよ。

鉄蔵が青葉のそばに刀を置き、去ろうとする。

庫兵衛

おい、狸、どこへ行くんじや。

鉄蔵

用事が済んだので、お山へ帰ります。

亥三郎

何がお山じや。鉄さん、あんた、さっきから、何をしとるんじや。

弓

(刀を持ち上げて)これは？

鉄蔵

青葉さんの父上の刀じや。返すのを忘れちよったから。

青葉

(弓から刀を受け取って)そのために、戻ってきてくれたんですか？

しま

ありがとうございます。

鉄蔵

(鉄蔵に)あんたの刀は、私が預かってるわ。今、持ってくるから。

亥三郎

いや、わたしにはもう必要ない。

鉄蔵

しかし、土佐に着くまでに、何があるか、わからんぜよ。

しま

土佐へ行くのはもう少し先じや。今は行きとんでも、路銀がないきに。じゃ、まだしばらくは都にいるの？

鉄蔵 青葉
ああ。今の長屋は出るがな。
(紙を差し出して) これ、小田原の親戚の住まいです。住む所が決まったら、手紙を下さい。

鉄蔵 (受け取って) ああ。

青葉 あと、これ。(と簪を差し出す)

鉄蔵 わしにくれるつちゅうんか?

青葉 いっぱいお世話になったから。

鉄蔵 わしより、女将さんにやったらどうじゃ。小田原までの路銀は、女将さんが

しま 出してくれたんじやろう?

しま いいのよ、そんなことは気にしなくて。

庫兵衛 もらってやれ、鉄。

えん (鉄蔵に) そうよ。青葉さんの気持ちなんだから。

青葉 (鉄蔵に) お願いします。

鉄蔵 わかった。ありがたく頂戴する。(と受け取る)

青葉 こちらこそ、本当にありがとうございました。

亥三郎 じゃ、行くか。

弓 気をつけて。

青葉・亥三郎・えんが歩き出す。

巳之吉 (青葉に) さよなら。

庫兵衛 (青葉に) 達者でな。

かよ (青葉に) 手紙、くださいね。

しま (青葉に) 元気でね。

青葉が立ち止まる。

亥三郎 どうした。
えん 行こう、青葉さん。

青葉が鉄蔵に駆け寄る。

鉄蔵 来るな。

しま 鉄さん。

鉄蔵 (青葉に) 行け。もう振り返るな。

庫兵衛 鉄。

鉄蔵 (青葉に) おまんは一人ではない。父上も姉上も、おまんのそばにおる。わ

青葉 鉄さん。

鉄蔵 山下青葉、行け！

青葉 はい！

青葉が歩き出す。

しま あれ、雨が止んでる。
弓 (空を指さして) あなた、あそこ。

庫兵衛

ああ、大きな虹じやのう。

人々が空を見上げる。空には、七色の虹がかかっている。

∧
幕
∨